

TOTO

2026年夏号

Toward a Creative
Architectural
Scene

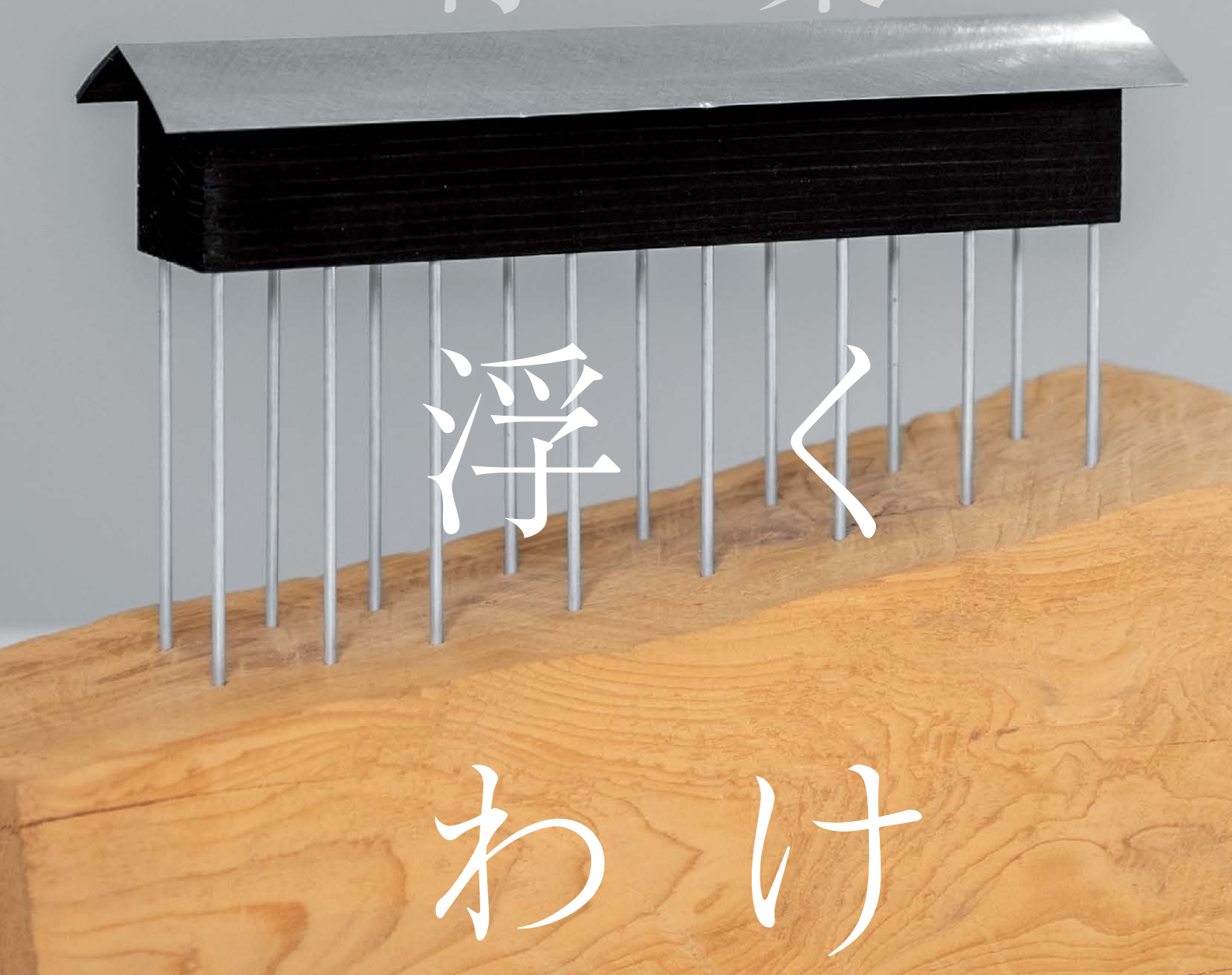
通信

特集

Special
Feature
Why it floats

浮く

わけ



3

Villa Boso

浮遊しているように見える住宅が散見される。高床建築のように床を上げ、建物の向こう側が見える。浮いている。しかし表現として、浮かせること自体が目的ではないようだ。まず察せられるのは、水害への対策。15年前の大災害からより拍車をかけて意識が高まってきた。そのほかにも、高低差の解消、土中環境の改善、湿気対策。眺望もよくなるかもしれないし、あるいは植物や街に土地を開放することにもつながる。理由はいくつかあり、いくつもの意味が重なっているかもしれない。なぜ浮くのか？ その理由^{わけ}取材した。

4

near and far

4

シリーズ 古写真でみる建築家のアトリエ13

アントニ・ガウディ 文／山村 健

42

現代住宅併走64

「聴竹居 下閑室」 設計／藤井厚二 文／藤森照信

44

最新水まわり物語71

埼玉県こども動物自然公園

50

TOTOギャラリー・間で展覧会をします

ラウムラボア・ベルリン展

56

News File

TOTO News, Cera Trading News, Books

58

「間の庭」 10

「カマクランド」 18

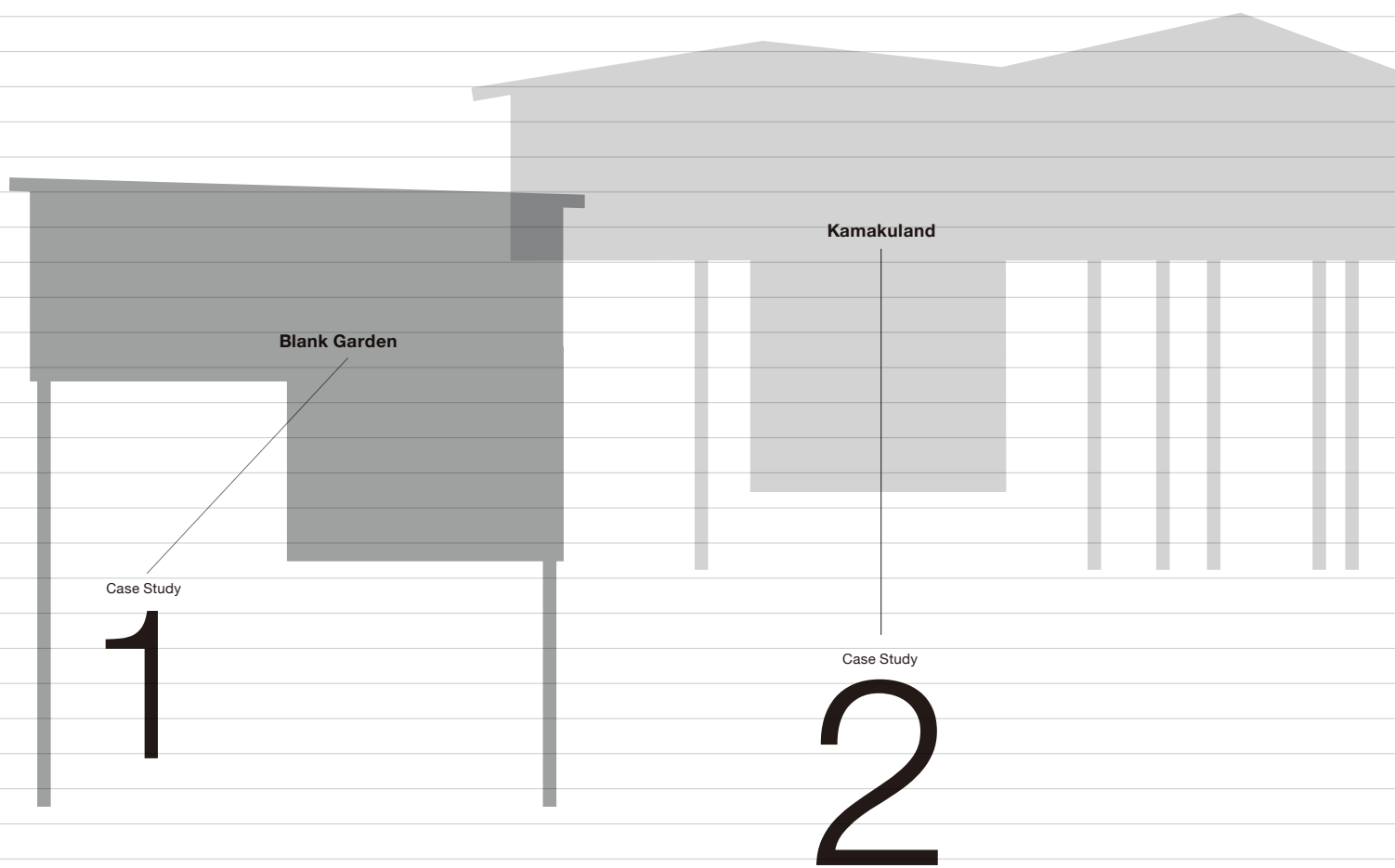
「房総の別荘」 26

「近くと遠く」 34

表紙の写真は、「房総の別荘」のコンセプト模型。
強い地盤まで約4～8m杭を打ち込んでいる様子
を表している。

表紙／「房総の別荘」の模型 撮影／桑田瑞穂
編集制作／伏見編集室 デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

浮かせる



TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 542
Summer 2026

インタビュー

浮遊建築の潮流

能作文徳+常山未央

ケーススタディ1

水害をかわし、地面を街に解放する

畝森泰行

ケーススタディ2

建築を浮かせて、水の溜まりをつくる

三家大地

ケーススタディ3

19本の杭に、ぽんと置く

寺本健一

ケーススタディ4

浮かぶ住まいが、近所の風景を編み直す

板坂留五+西澤徹夫

「TOTO通信」は
インターネットでも
ご覧いただけます。



<https://jp.toto.com/pages/knowledge/useful/tototsushin/>



浮遊の建築

Special Feature
Why it floats
Interview

「西大井のあな」にて。土を露出させた元駐車スペースに植えられた植物が、頭の高さを超えて育ってきている。

能作文徳

聞き手／伏見 唯
まとめ／賛川 雪
写真／山内 秀鬼

のうさく・ふみのり／1982年富山県生まれ。2005年東京工業大学工学部建築学科卒業。07年同大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。10年能作文徳建築設計事務所設立。同大学院助教、東京電機大学准教授、東京都立大学准教授を経て、24年より東京科学大学准教授。博士（工学）。おもな作品Ⅱ「明野の高床」（21）、「杭とトンガリ」（22）、常山未央との共作、「西大井のあな」（工事進行中、常山未央との共作）。

常山未央

つねやま・みお／1983年神奈川県生まれ。2005年東京理科大学工学部第二部建築学科卒業。05年フット・ザバタアーキテクトゥ（スイス）。06年スイス政府給費留学生。08年スイス連邦工科大学ローザンヌ校建築学科修士課程修了。08年H H Fアーキテクトゥ（スイス）勤務。12年m n m設立。東京理科大学助教を経て、20／21年同大学特別講師。22／23年スイス連邦工科大学ローザンヌ校客員教授。23／24年コロンビア大学GSAPP客員准教授。おもな作品Ⅱ「不動前ハウス」（13）、「杭とトンガリ」（22）、能作文徳との共作、「西大井のあな」（工事進行中、能作文徳との共作）。



Tsuneeyama Mio

Nousaku Fuminori

基礎のあり方を問い直すなかで「浮く建築」を実践してきた能作文徳さんと常山未央さん。

ふたりの背景にあるのは、土壌の水脈や微生物環境を傷つけず、

雨水の通り道をつくりながら自然循環を保とうとする視点だ。

独立基礎や鋼管杭、石場建てなど、敷地条件に応じて基礎を工夫することで、

湿気や水害への対策、眺望の確保だけでなく、床下に新たな居場所やコミュニティを生み出す可能性も見えてくる。

建築を「浮かせる」ことは単なる造形ではなく、環境や社会との関係を再編する試みでもあるのだろう。

土中環境への

関心から

から、こうした設計をされるようになったのでしょうか。

常山 先に「建物を浮かせよう」という発想があったわけではなく、出発点にあるのは土中環境への関心でした。千葉県を拠点に、自然環境の改善を目指した造園や設計施工に取り組んでいる高田造園設計事務所と出会い、菌糸と土壌が本来備えている力について知ったことが、大きなきっかけになっています。

能作 代表の高田宏臣さんは、ダーチャフィールドと呼ばれる里山の実験施設で、土壌改善などさまざまなプロジェクトを実践されています。そこで、傾斜地を整地したり、基礎にコンクリートを使ったりせずに済むように、伝統構法の石場建てで建てた小屋などを見せてもらったんです。そのとき、私たちには、大地や地中の水脈を極力傷めないという視点が欠けていたと気づかされました。そこから自分たちでもできることをやってみたくなくて、まずは自宅「西大井のあな」の駐車スペースのコンクリートをはがし、土を露出させてみることから始めました。

常山 「蟻鱒鳶^{アリマス}ル」の岡啓輔さんにはつり機をお借りして、約2カ月半のあいだ、スタッフと毎日1、2時間ずつコンクリートの掘削作業をしたんです。

たった自動車1台分のスペースのコンクリートですが、ガラ袋が山盛りになりました。さらにそれらを1・5tのトラックにのせて自分たちで搬出もしましたが、運転中は時速60kmくらいしかスピードが出なかった。相当な重量のゴミが出たわけですよ。

能作 はがすのも手間がかかり、搬出するにも重くてかさ張り、再利用することさえ難しい。いかにコンクリートは始末が大変なものなのか、身をもって実感しました。こうした経験から、コンクリートの使用を最小限に抑えながら建築をつくることを考えるようになったんです。住宅を考えてみれば、べた基礎が建物におけるコンクリートの量の大部分を占めています。だからこそ、基礎を工夫して建物を浮かせれば、コンクリートの使用を抑えながら土壌にもよい建築ができると考えました。

実作にみる基礎の工夫とその理由

——土中環境の保全とコンクリートの不使用が「浮くわけ」になっていたんですね。「明野の高床」(2021)は、コーン型の基礎で建物が浮いているのがとても印象的です。

能作 当初「明野の高床」の基礎には、鋼管杭を採用する予定でした。しかし、敷地の地盤が強固すぎて鋼管杭が打ち込めなかったんです。そこで、こうした独立基礎に変更しました。地中の硬い地盤の上にリサイクル可能な鉄板でできたコーン型の基礎を置き、床面が地盤から1mの高さになるように

建物を浮かせています。高床にしたことで、南側にある富士山も室内から望めるようになりました。

またこの建物では、クライアントと私たちの生分解性の自然素材への関心から、ストローベイルハウス構法を用いています。みんなで壁材兼断熱材であるストローベイル（藁ブロック）を積み上げて土塗りし、床や天井の断熱材にはウッドファイバーを採用しました。当初はストローベイルは重量があるため、高床と相性が悪いのでは、と心配していました。しかしその問題さえクリアすれば、床下の通風を確保して藁を湿気から守ることができるので、むしろ理にかなっているように思います。

常山 高田さんと出会う前から、私たちは自然素材や環境住宅についても、積極的に学んでいきました。そのなかでどうしても違和感を覚えたのが、基礎の断熱だったんです。スタイロフォームは石油ベースの化学製品なので、やはり環境によいとはいえません。それに、べた基礎をスタイロフォームで断熱する場合、熱橋を防ぐとすると、基礎に沿って非常に複雑な形状になるんですよ。高床にすることで、断熱もすっきりと納められるし、生分解性の素材も使えるようになります。

能作 地熱を使えないという弱点はありますが、よほどの寒冷地に建てる場合でなければ、浮かせた床に断熱をすれば解決できると、私たちは考えています。

常山 また、べた基礎にすると床下の湿気も問題になります。換気扇やエアコンで風を吹き込んで湿気を解決する仕組みの環境住宅もありますが、高床にすれば、こうした機器を使わなくてもシンプルに床下を乾燥した状態に保てますよね。

—— 原始からある高床が本質的な環境住宅だと気がついたわけですね。続いて「杭とトンガリ」(22)では、先ほど断念した鋼管杭が基礎に採用され、建物が地面から少し浮いています。

能作 山梨の「明野の高床」でやったことを、今度は都会である渋谷区の商店街で実現できないかと考えました。貸し店舗という機能の面から考えれば、



2点ともに撮影／鈴木淳平

あけの 明野の高床

(2021)

山梨県北杜市の集落に立つ高床式の住宅。土中環境に影響を与えないように、最小限の独立基礎を鉄板で構成。コンクリートが不要となった。ほかにも藁ブロックやウッドファイバーの断熱材など、生分解可能な素材を積極的に採用した。

建物は地続きのほうが理想的かもしれませんが、しかし、クライアントと一緒に将来の建物の解体や環境への影響について話しあうなかで、こうした形にすることになりました。

「明野の高床」とは対照的に、こちらは地盤が非常にゆるかった。そのため、家の高さよりも長い14・5mもの鋼管杭を地中に埋設して、軽量な木造2階建ての建物を持ち上げています。また、鋼管杭の先端はドリル状に加工しました。

常山 杭の残置に対する問題意識から、こうしたデザインをしています。湾岸部の高層エリアでは、引き抜くのが難しく撤去できず、地中でごみになっている杭基礎が現在深刻な問題になっています。残置された杭の合間を縫って、次の杭を打っているような状況だといえます。こうした残置杭を再利

用するための技術も開発されていますが、現状では1回しか再利用ができません。そこで「杭とトンガリ」では、解体時に鋼管杭を逆に回転させて引き抜き、撤去ができるようにしています。

能作 加えて、高田造園設計から学んだ土壌改善の方法も実践しています。雨樋をなくし、代わりに露出させた土に雨が浸透するように仕組みをつくりました。具体的にいうと、まず30cmほどの溝を掘り、割竹を使って土留めを施します。さらにそこに1mほどの縦穴を掘り、節抜きの竹や小枝を打ち込んだり、竹炭や落ち葉を敷き詰めたりして、その上に碎石を被せるんです。こうすることで、土中に水と空気の通り道が確保され、微生物や有機物が循環する環境が生まれます。

——「秋谷の木組」(23)の基礎は、コンクリートですね。

能作 「明野の高床」では鉄板、「杭とトンガリ」では鋼管杭というように、こ

杭とトンガリ

(2022)

東京都内の商店街に立つ
木造2階建て貸し店舗。
鋼管杭の基礎で木造躯体
を持ち上げることで、床
下の風通しとメンテナンス
経路を確保しつつ、土
壌を露出。雨水や空気を
地面に浸透させることで、
土中環境を改善する試み。



2点ともに撮影／鈴木淳平

のふたつの作品では基礎にリサイクル可能な鉄を使用しました。しかしじつは、コンクリートのべた基礎が主流の現状では、工務店からこうした普段なじみのない工法に対する不安の声もあつたんです。加えて「秋谷の木組」は、敷地が水の溜まりやすい形状かつ海の近くだったため、錆の発生する可能性のある鉄を基礎に使うことがはばかれました。環境住宅のプロトタイプとして設計し、今後別の土地にも展開する予定のプロジェクトだったこともあって、どんな敷地や工務店でも施工可能な普及型として、コンクリートながらも使用を最小限に抑えた独立基礎を考えることにしたんです。

常山 45度に張り出した形状の独立基礎にすることで、コンクリートの総量を減らしつつ、基礎のあいだを風が通り抜けるようにデザインしています。結果的には、べた基礎にした場合と比較して、約60%もコンクリートを削減することに成功しました。

——3つの作品はいずれも高床でありながら、基礎の工法がすべて違うわけですね。こうしたある意味では特殊な基礎を設計施工する場合には、何か固有の人間や大変だと感じる作業はあるのでしょうか。

能作 ひとつ挙げるとすれば、やはり建築確認申請でしょうか。以前、千葉県鴨川市の釜沼集落で「結庵」(24)という小屋をつくりました。ここは都市計画区域外なので本来申請は不要ですが、2階以上の石場建てをつくろうとすると、申請には限界耐力計算が必須となりました。つまり、高さ60mを超える超高層建築物の申請と同様に、建物が地震時にどのように挙動して変形、崩壊するかをシミュレーションしなければならなくなったわけです。また、計算だけでも大変なのに、提出先の自治体によっては、その確認にさらに膨大な時間を要してしまうことがあります。

常山 「秋谷の木組」では、基礎の立ち上がり部が独立しているために、計算書を別途提出してください、と言われたんです。普通は、基礎に対して計算書が要求されることはありません。ほとんどの建築ではべた基礎を採用していて、論理は同じですからね。複雑な形状が基礎屋さんに嫌がられたこともあり、コンクリートの使用量は抑えて風通しも保ちながら、現在は確認申請



2点ともに撮影／鈴木淳平

秋谷の木組

(2023)

再生可能エネルギーで次世代の住まいを目指す「秋谷ウイレッジ」内に計画された木造住宅。伝統構法とオフグリッドを採用。土に還る自然素材を使用した。三又の独立基礎としたことで、コンクリート使用量が大幅に削減された。

が容易な、垂直の下駄のような形状の基礎を考案しています。

能作 最初は挑戦的なことを積極的にやりましたが、毎回さまざまな問題に直面してきたので、なんとか簡易化できるように改良している最中です(笑)。鋼管杭を基礎に使うこと自体はそんなに難しくないのですが、請け負ってくれる工務店が限定されるという課題が大きいんですね。

「浮く」ことで課題を解決する

の作品にも、さまざまな「浮くわけ」がありました。まずは、敷地が抱えている解決すべきネガティブな課題からみていききたいと思います。

ひとつ目は、敷地の水はけの改善です。寺本健一さんの「房総の別荘」(26頁33ページ)は、目指していることが「杭とトンガリ」と重なる部分が多いように感じました。まず寺本さんもおふたりと同様に、コンクリートを極力使用しないことを標榜されていますよね。そのため「房総の別荘」では、基礎に約8mの鋼管杭を採用して木造の建物を安定した地盤で支えつつ、雨水が敷地の傾斜に沿って流れ、土中に浸透するように工夫しています。三宅大地さんの「カマクランド」(18頁25ページ)も、谷地のために溜まりやすい雨水が土に浸透していくようにと、べた基礎を最小限にしていました。

常山 そもそも、日本の家屋は浮いているものでしたよね。近代的な発想で、強固な素材や技術を用いて水流を堰き止めるよりも、旧来どおりに建物を浮かせて受け流すほうが、私たちにはエコロジカルで現実的な解決策のように感じられます。

——ふたつ目は、「明野の高床」でも指摘されていた、湿気対策です。「房総の別荘」が高床になっている理由のひとつは、クライアントが所蔵するアート作品を、勝浦の多湿な地面から離して保護するためでした。

常山 やはり湿気は建物の大敵です。どうしても、内装の木部や畳にも影響しますよね。湿気が上がってこないように、床下に空気を循環させて乾燥した状態を保つことは、土壌にも建物にも重要だと考えています。

——そして触れざるをえないのは、水害対策です。やはりおふたりも、東日本大震災以来、意識が高まっていると感じますか。

常山 近年、集中豪雨の発生頻度が急増していますね。震災の教訓もあり、私たちも敷地周辺のハザードマップは必ず確認し、想定される氾濫危険水位よりも床が高くなるように設計しています。

——畝森泰行さんの「間の庭」(10頁17ページ)は敷地の最大浸水深さが約4mもあるため、居住空間をそれ以上に持ち上げています。また、板坂留五さんと西澤徹夫さんによる「近くと遠く」(34頁41ページ)も、隣接する川の氾濫対策が理由で鉄骨の高床形式になっています。

能作 水害対策は、今後さらに重要な課題になっていきますね。私は大学院

で「アーバン・フラディング」(Urban Flooding)、都市部の浸水・洪水被害)をテーマにデザインスタジオの授業をしました。気候変動によって、2100年には海面が現在より約1m以上上昇する可能性が指摘されています。そうになると、東京の沿岸部の多くは水没する。しかし、東京都が出している対策ビジョンは、基本的に壁を建てるというものなんです。ここまでの広範囲をすべて壁で囲うなんて、現実的ではありません。こうした状況において本当に有効な対策はどのようなものか、考える機会がますます必要です。

常山 この数年、ニューヨークでも、地下鉄が浸水するほどの豪雨が数回ありましたよね。そのため現地では、「都市のスポンジ化」が重要課題になっていると聞きます。都市型農園「ブルックリン・グランジ」では、倉庫の屋上を土にして農業をしています。雨水をいったん土に吸収させ時間差をつくって流すことで、都市災害を緩和するという目的もある。土を雨水の吸収体として使う発想は、今こそ見直されるべきではないでしょうか。

「浮く」ことで 創出される豊かさ

——それとは別に、高床だからこそ得られるポジティブな特権や、思わぬ副産物もあります。まず、眺望はその最たるものです。またそれ以上に印象的だった

のが、床下の半外部の空間の使われ方でした。「間の庭」では樹木を植えて、敷地のない庭を床下に確保しています。「カマクランド」でも、床下が庭の延長のような空間になっていました。「近くと遠く」は別に広い庭があるので、この空間は園芸のための作業場に活用されています。いわば、工事が上がるなかでの床のボーナスです。おふたりとは別の視点かもしれませんが。

能作 私は、床下を庭にすることについては、やや懐疑的です。雨水が当たるところに植物を植えるほうが本来自然だし、湿気対策で高床にした場所に水を撒くというのは、なんだか矛盾しているように感じるんですね。土が身近にある喜びは私たちも日々実感しているし、その土で植物が元気に生えていたらうれしくなってしまうけれど、建物を長持ちさせるという観点では、やはり床下の水や湿気は可能な限り排除するべきかな、と思います。

——もうひとつが、床下がピロティとして利用され、なおかつコミュニケーションの開かれた空間になっているケースでした。これについては、結果的にそうなったところもあると思います。たとえば「近くと遠く」のクライアントは、ここで庭作業やDIYをしていると、通りがかった近隣の方に声をかけられる機会が増えたと話していました。また「間の庭」は4mも立ち上げているので、隣にあるクライアントの実家とのあいだにどうしても距離感が生まれてしまいましたが、代わりに新しい床下の空間が、祖父母と孫たちが過ごす場所として使われるようになったといえます。

能作 建物が浮くことで生まれた開放的な空間が、人のつながりやコミュニティを誘発するきっかけにもなっているんですね。

常山 思い返せば、私たちが学生だった頃は、基礎なんてまったくデザインの対象じゃなかったんですね。それがこんなふうに設計対象の一部になり、コミュニティにまで寄与する可能性が発見されているというのは、とてもおもしろかったです。

むすびあん 結庵

(2024)

棚田で収穫された稲藁を活用した合掌造りの小屋。仕口は伝統的な木組みで、基礎は石場建て。焼きマツ杭を打ち、砕石と割栗石を転圧、その上に墓石の端材の御影石を礎石として置いた。



2点ともに撮影／新建築社

Special Feature
Why it floats
Case Study

1

Blank Garden



建築は本来、大地に固定される存在であり、「浮遊感」とは無縁のはずだ。東京・江戸川区に立つ住宅「間の庭」は、その前提を鮮やかに裏切る。極細の構造体によって宙に持ち上げられた居住空間と、地面を解放した空地は、視覚的・身体的に強烈な浮遊感をもたらす。その開かれたたたずまいは、住まい手にとどまらず、近隣にも明るさや開放感を届ける存在となることだろう。



浮くわけ >>

- ・水害対策（4mの浸水想定）
- ・庭の確保
- ・隣の実家や地域コミュニティとの接点

水害をかわし、地面を街に解放する

南側からの外観。河川からの水害対策のため、100mm角の鋼管で4mほど持ち上げている。





1



2

1／2階の玄関とワークスペース。奥が室1で、木製建具で自由に開閉できる。
2／吹抜けと外階段。右に見えるのが隣接する地区会館。
3／庭室。基礎打設時の残土を利用し地面に起伏。2階の床を屋根から吊ることで中央の柱を省略できた。

強烈な浮遊感

住宅に限らず建物はどれほど軽快に見えようとも、およそ「浮遊感」とは無縁だ。

建物はすべからず大地に括りつけられているからだ。いや逆に大地に括り

つけられている構築物の一種を建物と称するのか。巨岩の上の箱型の家、樹上に鎮座する鳥の巣のような小屋、ボートで行き交う水上の部屋。どれも

地面から離れているようでいて、実際には大地にしっかりと括りつけられていることに変わりない。

実見したなかで、ただひとつの例外がある。鳥取県三朝町、三佛寺投入堂さんぶつじなげいれどうがそれだ。平安時代建立の仏堂は断崖絶壁の窪みに見るからに危うい状態で引っ掛かっている。柱をはじめすべての部材が繊細を極める造形美のためか、遠く上方に仰ぎ見るしかない位置関係

によるのか、堂の全体が浮き上がっていき、オーバーハングする岩にぶつかって上昇を阻まれ、震えながら一時停止しているかのような姿。比類ない浮遊感。

とはいえ三佛寺投入堂はいくつもの特異な条件が重なって生まれた稀有な事例で、そもそも住宅ではない。平地に立つフツウの住宅に比類ない浮遊感などありえない、と思っていいたら痛烈なカウンターパンチをくらった。ここに紹介する「間の庭」がそれだ。

研ぎ澄まされたストラクチャー

東京・江戸川区の住宅地。平坦な土地に戸建ての住宅がどこまでも続く。概ね2階建ての凡庸な家並みをたどっていくと、突如「間の庭」が出現する。幅と奥行きが7・28m、高さが約9mの3階建ての外形は周辺の戸建てに比べるとやや大きいとはいえ、特段に目立つものではない。目を欺くのは1



3



浸水被害を避けるため、
居住スペースを高く持ち上げる。
そしてその下を樹木が繁る庭室とした。

Case Study 1 Blank Garden

階が空っぽであることだ。投げかける視線は壁にも窓にも扉にも行き当たらず、素通りして隣地に伸びていく。かろうじて視認できるのは上階への階段だけ。

もちろん上方の2層のポリウムが宙に浮かんでいるわけではない。外周に重量を支える8本の柱が確かにある。しかしそれらは断面が10cm角の鋼管。育ちかけの樹木の細い幹にさえ紛れてしまい、露出している排水管などのパイプ類のほうがよほど存在感がある。支えているというよりは浮き上がろうとするポリウムを大地につなぎとめているワイヤーかと見誤る。柱を水平につなぐH形鋼にしても高さは15cmに達しない。

室内、2階、3階の床スラブは直径3cm足らずの1本の鋼棒で屋根の大梁から吊られている。それによって1階では外周に柱があるだけで、その内側には柱がない。ブレースが要所に設置されているとはいえ、全体としてなんという儚い構造体であり、なんという浮遊感であることか。

このがらんとした空っぽ感は2階、3階の居住スペースにも横溢している。柱らしきものが目につかず、頑丈な耐力壁らしき存在もなく、梁のH形鋼はといえば木製の造作のスケールにフィットして違和感がまったくない。変更しやすいように間仕切りは最小限にしてほしいという施主の要望に沿ったプランニング、引き戸を多用したほぼワンルームといえる空間には光が満ち、明るく、翳りが無い。



屋根から床を吊り下げた無柱空間。
極細のストラクチャーが構成する、
明るく開放的な室内。

4

Case Study 1 Blank Garden

2階の床の全面に磁器質タイルが敷き詰められていたり、吹抜けまわりの手すりが外部の階段と同じ仕様であったり、内外の連続が強く意図されている。室内の開放感は極限まで高められている。

人が地面に関わるための「間」

とはいえ開放感がハンパないのは平面7・28m角の1階のスペースである。前述のように8本の極細の鋼管柱の存在は消えたも同然で、上方のボリュウムの存在も地上4mに持ち上げられているゆえに意識の内に入っていない。雨も日差しも適度にさえられるものの、軒下という感覚からはほど遠く、南側の貸し駐車場、東側の両親の家の庭先と地続きの広がりが強く意識される。周辺の稠密に立て込んだ住宅地にあって、塀でさえぎられることがなく前面の道路とつながる際立った空地となっている。

この別天地には残土を利用した低いマウンドが設けられてやわらかく開かれ、コンクリートの平板が敷かれ、テーブル、椅子が置かれてくつろぎの場になっている。外周の柱は杭打ちで、地中を基礎梁がまわっているが、内側には基礎梁もコンクリート床版もなく大地そのままなので水は深く浸透し、樹木は存分に根を張ることができる。アオダモ、ギボウシ、レッドロビンなど多種の植物が生育中で、築後2年を経過した現在は原っぱの様子だが、家

主は植物が自在に繁茂する庭にしようともくろんでいて、遠からずそうなるにちがいない。

ここには近所の子どもが遊びに来ることもあるだろう。花が育ち実がなれば通りがかりの住民から声がかかることもあるだろう。すでに来訪の気配がある鳥たちは頻繁に襲来するはずだ。小さな生き物が地中に、葉先にうごめくことだろう。さまざまな活動を招き入れ、多種多様な生物を宿す小さな楽園。その萌芽はすでに認められる。

設計者の畝森泰行さんの言葉を借りると「地面の生態に人間が関わり、それゆえに手入れの続く生きた場所が、違いをもつさまざまな『間』となり、この閉じがちな世界をほぐし、鮮やかに彩ることを私は想像している」となる。「間の庭」と題した所以である。

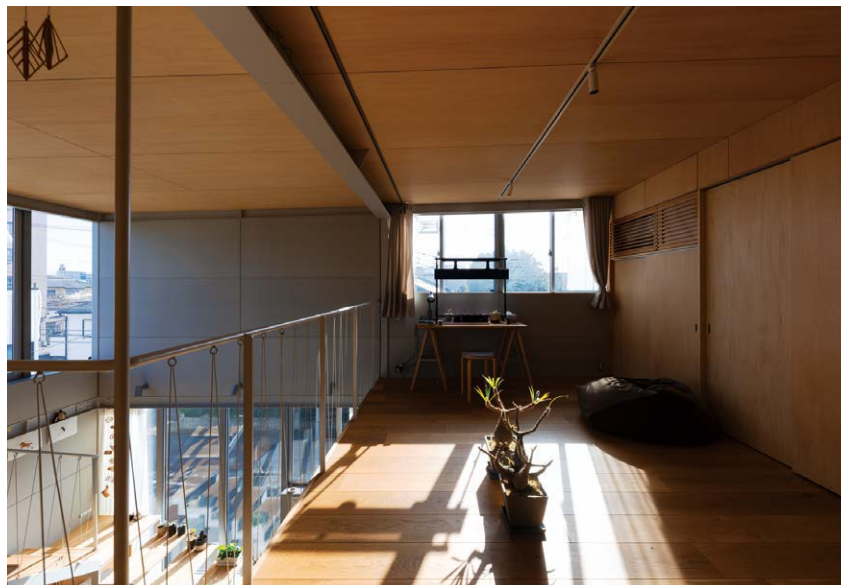
自然の猛威に しなやかに 対峙する

居住スペースを地上高くに設けたのは、施主や設計者の酔狂ではもちろんない。

立地する江戸川区には関東平野を流れ下ってきた何本もの河川や運河が集まっていて、広範囲で大規模な洪水被害が予測されている。公開されているハザードマップによると、「間の庭」の場合では千年に一度の確率だが最高浸水深さが3・87mとされている。それをぎりぎり回避するべく、2階の床レ



4 / 2階内観。右に玄関、左に室1。7.28m四方の柱のないワンルーム。
5 / 2～3階の吹抜け。奥にダイニング・キッチン。3階の引き戸の先はベッドルーム。
6 / 3階の室2。日当たり良好で植物がよく育つ。カーテンで仕切れば個室としても使用可能。
7 / 3階の洗面。



ベルが設定されたのである。津波のような強襲があるわけではなく、じわじわと水位が高まると予想されているので、ここで採った細い銅管柱の構造体が有効と考えられている。

6

いわば背水の陣として「間の庭」はつくられているのである。その意外の姿は洪水対策として冷徹な合理に導かれ、十分な普遍性を備えていると思われるが、角度を違えて見ると、大地の力を回復し、家並みを息苦しさから救い出し、コミュニティのつながりをゆるやかに強めるといったポジティブな潜在力があり余るほどもっていることに気づかされる。

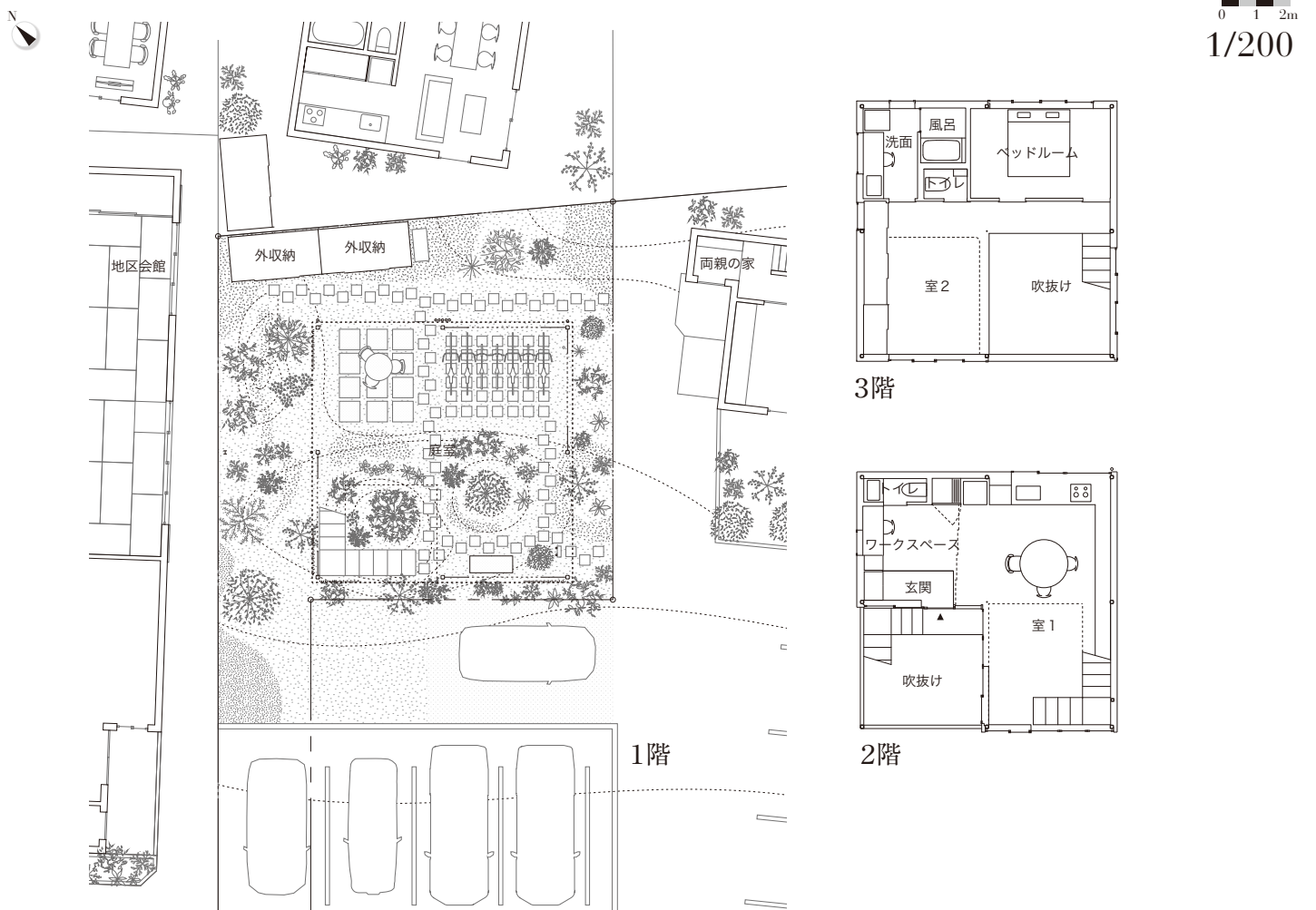
人間は自然の猛威を鎮めようと技術を駆使して大地に手を加え、人工のランドスケープをつくり出し、かりそめの平安を得ていたが、気がつけば大規模な被害の予測に直面してたじろぐばかり。自然の逆襲にちがいないが、それに対して「間の庭」はムダな抵抗をせず、自然体でひらりとかわし、超然と佇んでいるように見える。

いささかの不謹慎が許されるとして、どこまでも広がる水面に無数の「間の庭」が軽やかに浮いて連なる姿が儼に浮かぶ。ありえない？ いや、あるかもしれない千年の幻景。

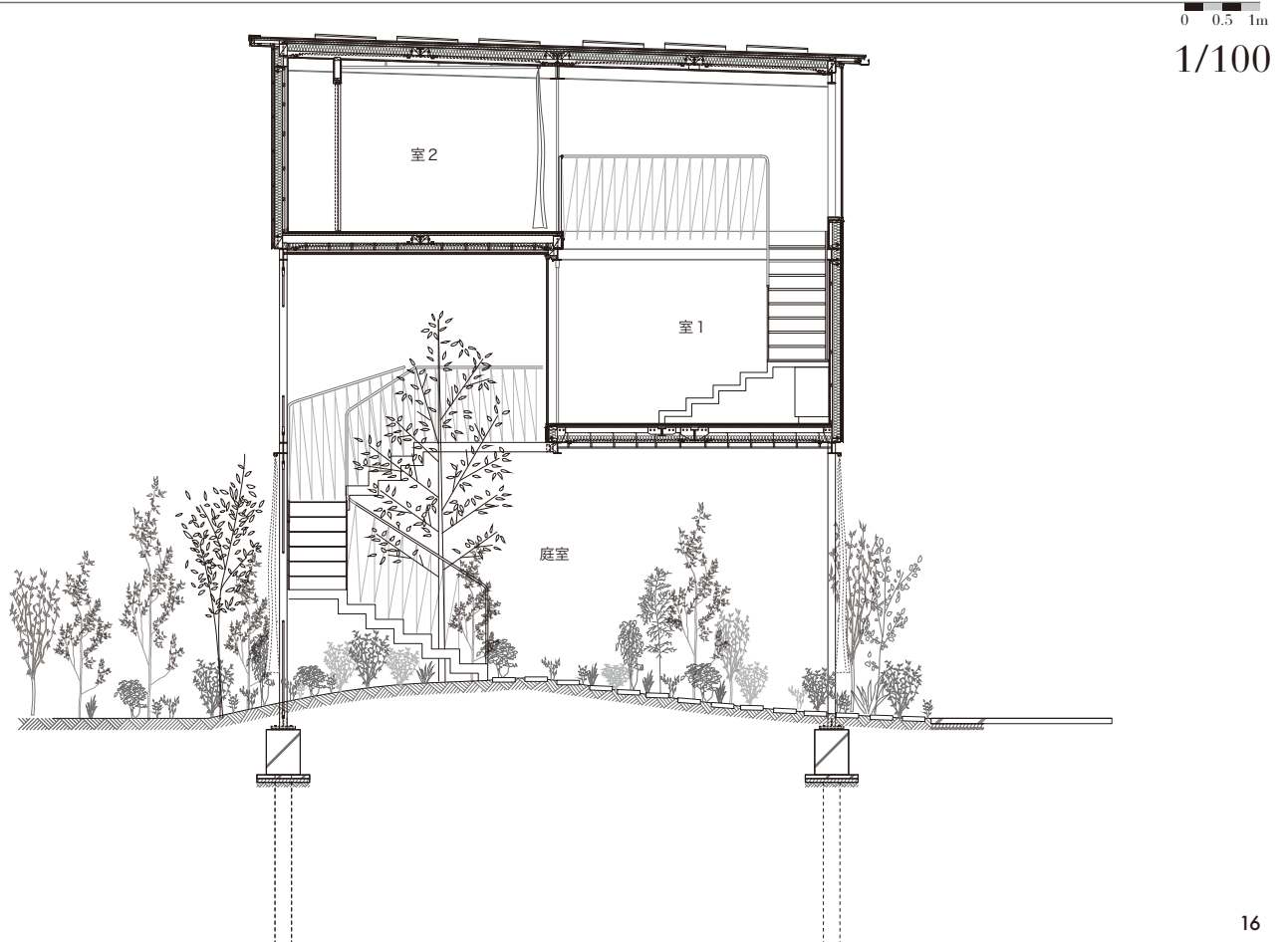
7



平面図



断面図



Case Study 1 **Blank Garden**



南側立面。右に両親の家、
左に地区会館。

間の庭

建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
設計	畝森泰行建築設計事務所
構造設計	オーノJAPAN
構造	鉄骨造
基礎	杭基礎
施工	栄建
階数	地上3階
敷地面積	152.83㎡
建築面積	54.83㎡
延床面積	103.35㎡
設計期間	2021年4月～23年3月
工事期間	2023年4月～24年4月

おもな外部仕上げ

屋根	カラーガルバリウム鋼板 t=0.4mm
外壁	窯業系サイディング t=14mm 撥水剤
開口部	アルミ防火窓、スチールドア
外構	コンクリート平板 t=60mm

おもな内部仕上げ

2階(玄関・室1・ワークスペース)

床	磁器質タイル t=9mm
壁	フレキシブルボード t=4mm 撥水剤、
天井	シナ合板 t=4mm 自然塗料

3階(室2・ベッドルーム)

床	オーク複層フローリング t=15mm 塗装品
壁	フレキシブルボード t=4mm 撥水剤、
	シナ合板 t=4mm 自然塗料、
	PB t=12.5mm AEP
天井	シナ合板 t=4mm 自然塗料

Unemori Hiroyuki

畝森泰行

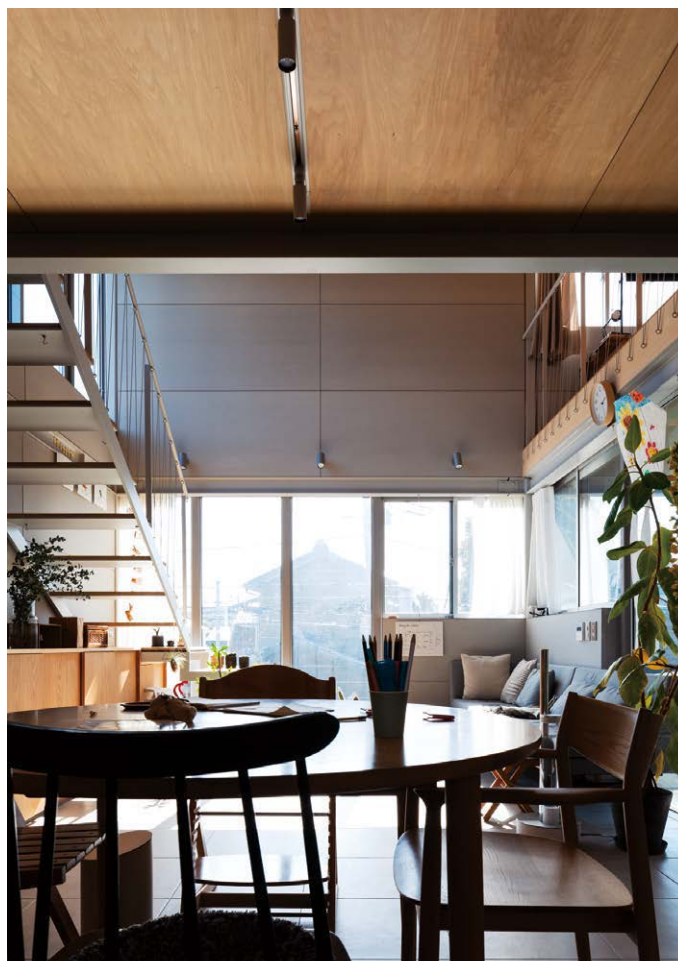


うねもり・ひろゆき／1979年岡山県生まれ。2005年横浜国立大学大学院修士課程修了。02～09年西沢大良建築設計事務所。09年畝森泰行建築設計事務所設立。おもな作品＝「Small House」(2010)、「須賀川市民交流センターtette」(18)、石本建築事務所との共作)、「岡田邸」(25)。



上／吹抜けから2階の室1を見下ろす。

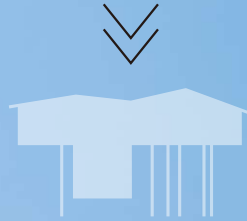
下／室1。ダイニングテーブル越しに南側を見る。



Special Feature
Why it floats
Case Study

2

Kamakuland



鎌倉山の谷戸に立つ住宅「カマクランド」。豪雨時には大量の雨水が流れ込む谷の地形に対し、基礎を最小限に抑え、居住空間を持ち上げることで地面を開放し、水を浸透させるランドスケープを実現。ブリッジやスロープによる立体的なアプローチ、谷戸の風や景色を取り込む中空の居住空間が、地形と応答し、自然と向き合いながら暮らす感覚を日常のなかに呼び戻している。



西側外観。鎌倉山の谷戸に立つため、水害対策で居住部分を基礎から約4.6m持ち上げた。

建築を浮かせて、水の溜まりをつくる



浮くわけ >>

- ・水害対策（谷戸の水はけ）
- ・上空は風が抜けて気持ちがいい
- ・谷戸の眺望
- ・広い庭の確保
- ・道路面へのインフラ接続



1

水の逃げ場をつくるために、
張り出すように居住空間をつくり、
地面を最大限に確保する。

Case Study 2 Kamakuland

鎌倉山の 谷戸に立つ

鎌倉山は標高1000mほどの丘陵で、豊かな山林を保ったまま開発された稀有な住宅地でもある。その歴史をたどると、昭和初期に尾根付近を中心に別荘地として開発され、今もその面影は色濃く残っている。そして高度経済成長期にはさらに谷戸を中心に小規模開発が進められ、宅地造成がなされていた。「カマクランド」はそうして開発された、鎌倉山中腹の谷戸に位置する。細く蛇行する坂道を下って敷地へ向かう道中、谷側には斜面の一部を造成した宅地と谷底の宅地が入り交ざって家が立ち、山側には擁壁の上に家が連なっていた。敷地に面する道路は開発当初に植えられた桜並木でもあり、地域全体で豊かな緑は維持されている。もともと三家さんとお施主さんの奥さん同士が友人だった縁で設計を依頼され、海も山もある鎌倉での生活を望むお施主さんと敷地探しから始めて、この地を選んだという。

現地に到着して建物の正面に立つと、道路より3mほど下がった敷地から木架構で持ち上げられた箱状の居住空間と、道路から敷地へ伸びる3つのアプローチが目に入った。浮かぶ箱はちろんのこと、多様に敷地と道をつなぐアプローチも印象的である。なぜ3つもあるのかというと、ひとつは既存の隣家との共用階段で、もうひとつは、駐車スペースを兼ねて現場監督でもあ

るご主人と三家事務所のスタッフが蛇籠に石を詰めて積み上げたスロープ、3つ目は道路から玄関まで8mほどの距離をつなぐ、空中に浮かぶようなブリッジである。

雨水の流れが導く 浮く理由

この個性的なたたずまいを導いた敷地の決め手を聞くと、「ひとつは220㎡の圧倒的な広さがあるから。もうひとつは、課題を抱える土地こそ建築家が向き合う意味があるから」と三家さんは言う。

課題とは、前面道路とのレベル差の解消もそのひとつだが、より深刻なのは、豪雨時の雨水である。敷地は谷戸の一部であるため、雨が降ると上から流れてくる雨水で川のような状況になるという。また高さはさほどないものの、四周がコンクリートブロックで囲われているため水の逃げ場がない。さらに土は粘土質なのである。

「放っておくとこの敷地が起因となって近隣で床下浸水が起きかねないので、どうにかして地面に浸透させようと考えました。そこで基礎の面積をできるだけ小さく抑え、上部に張り出すように居住空間をつくり、地面を最大限に確保することにしたのです」

これが建築を浮かせることとなった理由である。

しかし地面に浸透させるだけでは豪雨には対応しきれない。そこで水の流れと最大雨量を想定し、ランドスケー

プで解決することにした。三家さん自らが敷地に入り、地面を掘って水の流れる道をつくり、植栽を植える場所は根腐れしないように、掘った土をマウント状に整えていった。水の道にも高低差をつけて、低くなるところに浸透マスを設置した。「水の道の深さや道筋は、実際に現地で掘ってみないと何をもって良しとするか判断できません。図面や模型でスタディするものでもなくて、自分で掘るしかないのです」

今年の豪雨で大量の水が流れ込み、マウントはまさに海に浮かぶ島のように。水のルートはうまく機能しているようだ。

「自分が住む周辺の環境を知ることが大切です。去年よりも今年は豪雨が多

いと感じたなら、それに応じた行動を起こせるくらい、人は環境に敏感であるべきです」と三家さんは言う。異常気象が続く昨今、環境の変化を感じる人は多いだろう。それを自分ごととらえて行動を起こせるかは、私たちにとっての課題でもある。

浮かぶ住まい、家族と自然の距離感

雨水問題を発端に、浮かぶこととなった住まいはどうか。小さく抑えた基礎を1層目として、上2層分を軸組で持ち上げている。一番高いレベルに、3・6m幅、約13mの奥行きをもつ細

長い箱を浮かせ、リビング・ダイニング・キッチン・子どもスペースとした。地面から持ち上げることで、雨水だけでなく、夏場の厳しい湿気も改善される。上に行けば行くほど、風も流れる。雑然とした日常を受け入れやすくするために、3185mmピッチで入る柱のグリッド感をゆるめようと、リビングとダイニングの天井高を変えて、屋根にふたつの頂部をもたせた。屋根面は水の流れを考慮して複雑に折り曲げ、それを支える柱と筋交いが居場所をつくる。ふたりのお子さん

のベッドスペースもリビングにあるが、柱と筋交いでゆるやかに分けられる。より境界をはっきりさせたいときは、お子さん自身が柱と筋交いに布をかけて（取材当日は景色を見たいためにはずされていた）、家族や自然との距離を調整しているという。

キッチン横の前面道路に面する壁に



2

1／北側外観。中央には玄関に至るブリッジ。左右にも階段とスロープがあり、庭へ直接アプローチでき、回遊することもできる。
2／東側、ブリッジの下から玄関を見上げる。持ち上げられた玄関の下は畑仕事などの作業スペースとなった。

3／畑とテラスを見る。豪雨の際に流れ込む雨水を、右手の庭で一時的に溜め込み、ゆっくりと時間をかけて土中に浸透させていく仕組み。

3



は幅いつぱいの窓を設え、春には隣家の桜の花を間近に望む。ダイニング横の窓から入る風は、対角にあるリビングの窓から抜けていく。リビングの窓からは庭を望むほか、さらに下つていく谷側の景色を一望する。軸組を現し、ヒノキの合板で壁・天井を覆った架構は木を身近に感じさせ、筋交いが窓の前を横切っても気にならない、おもしろさがある。

一方、中間階は、道路に通る下水管の高さに合わせて、自然排水が可能となる勾配をとって、まず水まわりの位置を決めた。それを起点に、ブリッジとのレベル差を吸収するように玄関を1段上げて、主寝室は高さを確保するため床レベルを下げた。玄関から入った先の正面にバルコニーを設え、そのまま下階へと続く階段を設置。下階に

は基礎を利用した作業場と畑、テラスを設え、庭と連続させている。

そして外出する際には、浮遊するようなブリッジを渡っていく。「ブリッジを通って家と外を行き来するのはワクワクする。純粹な経験としてよいなと思つて」と三家さん。

谷戸で浮かせる メリットとは

ワクワクする経験はブリッジにとどまらず、内外に通底している。

樹上に居場所をつくるツリーハウスのように、コンパクトな室内は自然のなかに必要なだけの内部を開いたような感覚で、窓からの眺めや、上下階の移動途中にスリットから見える風景が、自然と隣り合わせであることを感

じさせる。内部に閉じない、外との関係を意識しながら生活を楽しむことにつながっている。それは同時に、谷戸に立つことを再認識し、日常のなかで周辺環境を観察する視点をもつことでもある。

外部に目を向けると、敷地と道路をつなぐ3つのアプローチには、状況に応じて動線を選べる利便性や楽しさがあるとともに、蛇籠の荒い石積みやブリッジ下部の小さな高架下のような土木的な状況には、整然とつくり込まれていないからこそ、手を入れる余白が感じられる。実際に蛇籠の隙間には克蘭ベリーの苗が植えられていたので、これから緑化されていくのだろう。

一方で、庭より掘り込まれ四周を観察できる作業室や、約5 m上部の主空間が雨をかわしてくれるテラスまわり、

豪雨の影響を免れる基礎上の畑など、住まい手が庭を楽しむ後押しとなる場も用意されている。

「谷戸で浮かせた建築は、あまり聞いたことがありません。しかし眺望を得るために丘の上で浮かせるよりも、谷戸で浮かせて心地よい風を感じたり、方角によって異なる地面との距離を認識したり、谷間に広がる鎌倉山の稜線と空を眺めたりするほうが、浮かせる効果は大きい」と三家さんは言う。

雨水の問題を可視化した「浮かぶ建築」は、住まい手が自然の豊かさを享受する一方で、あらゆる状況において周辺環境を観察する視点を持ち、なおいつそう変化を見ている自然と折り合いをつけながら住みこなししていく、そうしたたくましさを引き出すものになっていた。



4 / 2階のリビングからダイニング・キッチンを見る。手前と奥に2つの頂点をつくり、柱と筋交いで構成。
5 / 2階のリビング。





6 / 2階のリビングから
1階の玄関を見下ろす。
7 / 1階の玄関。斜めに
かかる階段を上がると2
階リビング。裏手にはパ
ルコニー。

高く持ち上げられた室内には、
谷戸の風景が流れ込む。
夏場の湿気を避け、明るく風が抜ける。

Case Study 2 **Kamakuland**

7 6

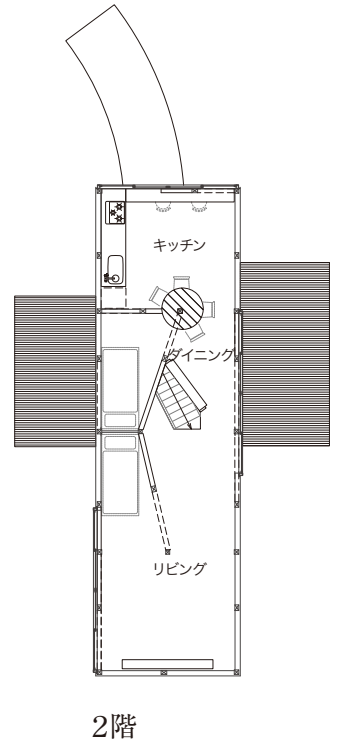
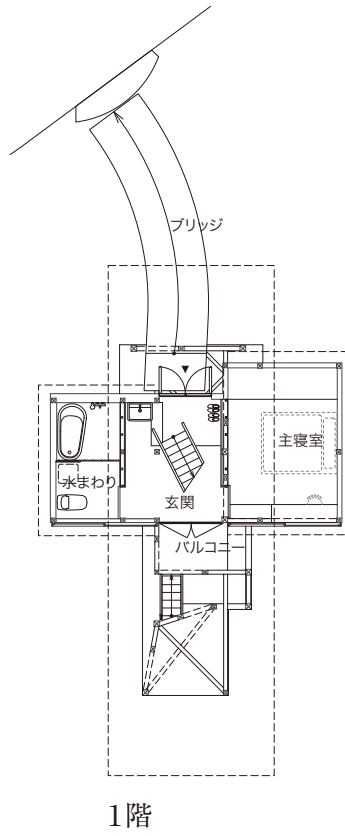
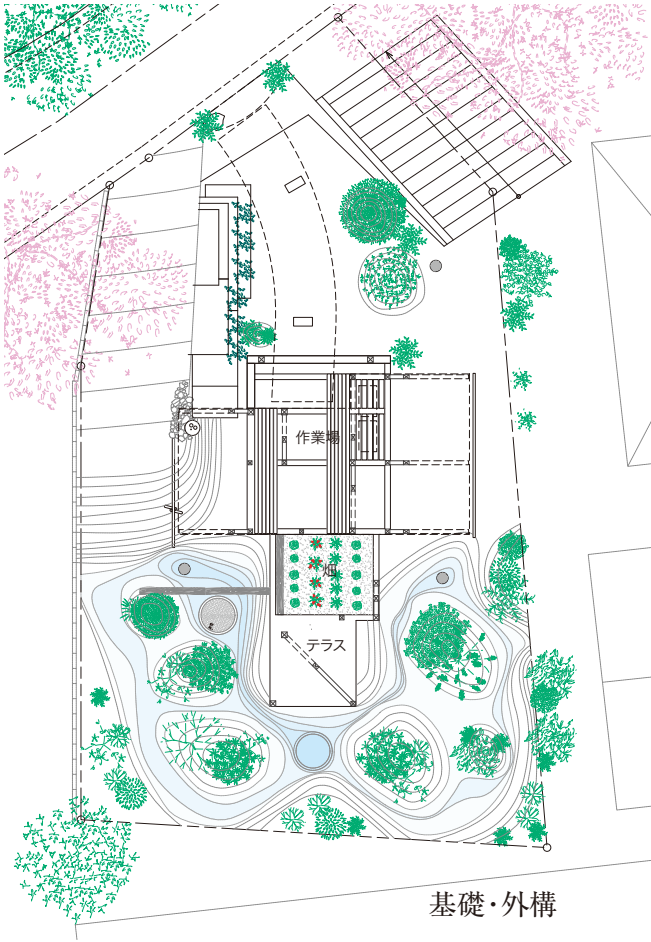


平面図



0 1 2m

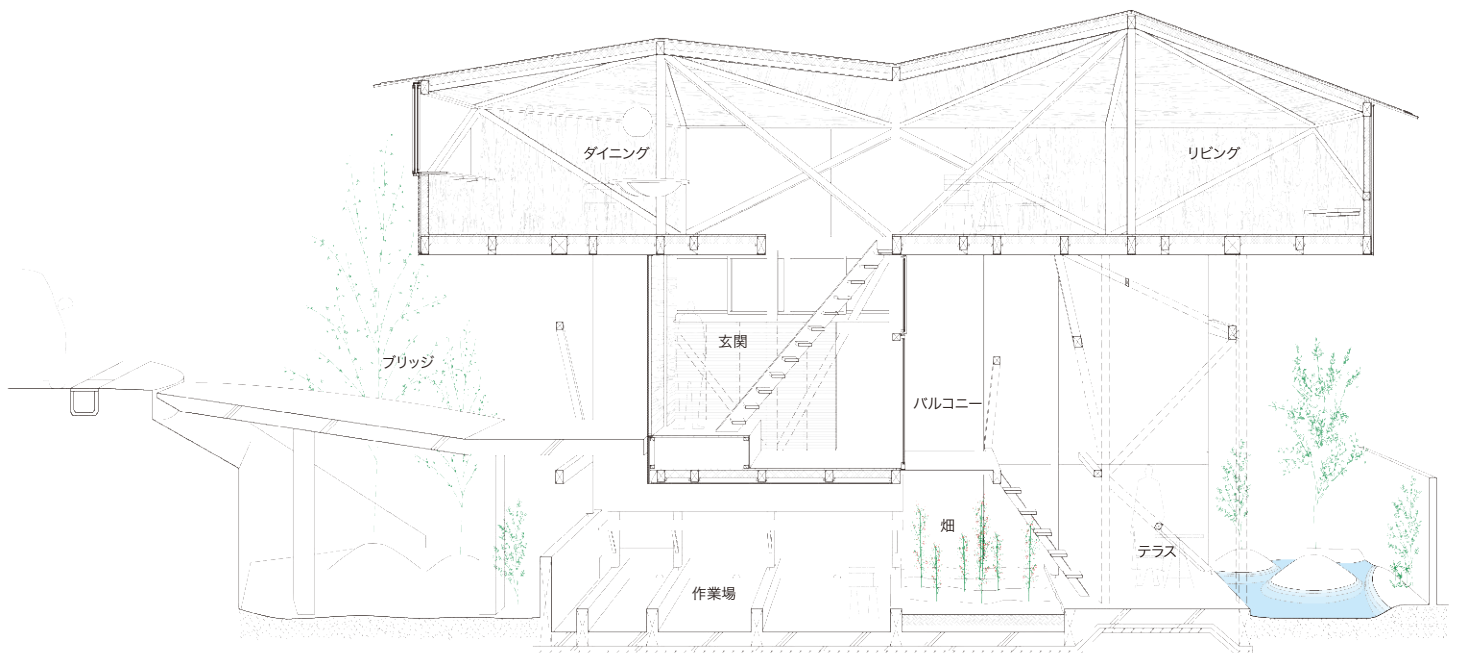
1/200



断面図

0 0.5 1m

1/100



Case Study 2 Kamakuland



谷戸に浮かぶ、南側外観。

カマクランド

建築概要

所在地	神奈川県
主要用途	専用住宅
設計	三家大地建築設計事務所
構造設計	平岩構造計画
構造	木造
基礎	べた基礎
施工	ダブルボックス
階数	地上2階
敷地面積	218.90㎡
建築面積	60.72㎡
延床面積	73.15㎡
設計期間	2022年1月～24年6月
工事期間	2024年7月～25年2月

おもな外部仕上げ

屋根	長尺小波銅板 塗膜防水トップコート仕上げ
外壁	長尺小波銅板 横張り
開口部	アルミサッシ、木製建具

おもな内部仕上げ

1階(主寝室)	
床	タイルカーペット t=9mm
壁・天井	ヒノキ合板 t=5.5mm
2階(リビング・ダイニング・キッチン)	
床	リノリウムタイル t=2.5mm
壁・天井	ヒノキ合板 t=5.5mm

Mitsuya Taichi

三家大地



みつや・たいち/1979年奈良県生まれ。2003年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業。04～12年西沢大良建築設計事務所。12年三家大地建築設計事務所設立。おもな作品=「川崎の住宅」(14)、「荏原台地の家」(19)、「三家ランド」(22)。

カマクランドの動画を
ご覧いただけます

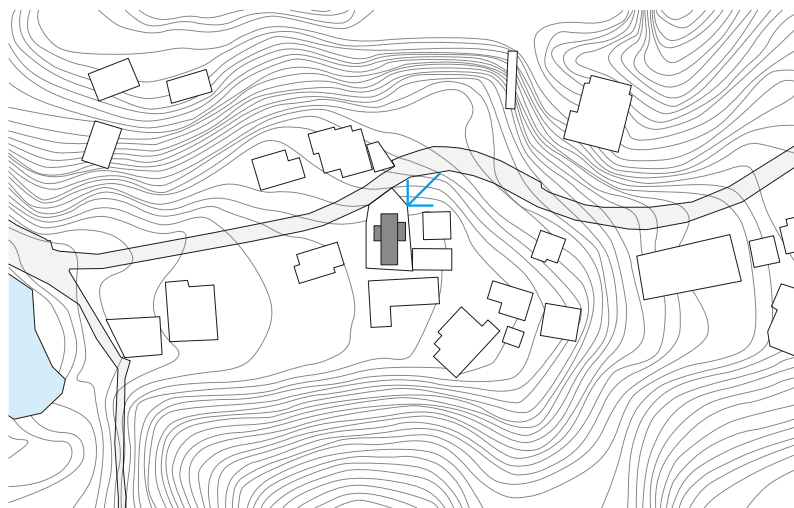


配置図



0 10 20m

1/2,000



上/1階玄関。右奥には
68cm下がった主寝室。

下/西側の片流れの下屋
には水まわりが納まる。



19本の杭に、ぽんと置く



Special Feature
Why it floats
Case Study

3

Villa Boso



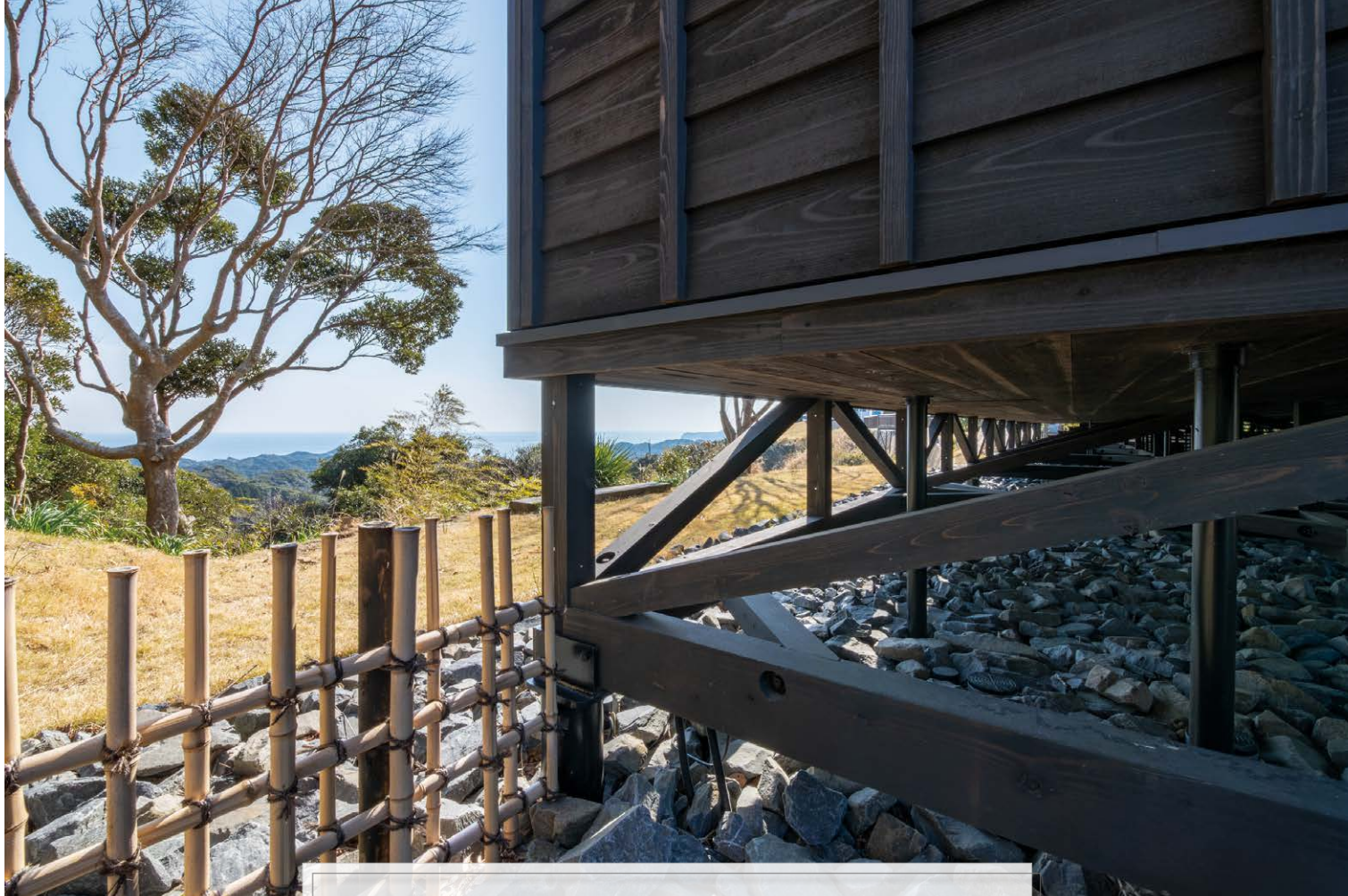
海を望む丘の上に立つ「房総の別荘」は、地面から少しだけ距離をとるように浮かぶ。不同沈下を起こした既存住宅の建て替えにあたり、造成された脆弱な地盤ではなく、地下7mの古層に鋼管杭を到達させることで建築を支えた。さらに、コンクリートをいっさい用いない「ゼロコンクリート建築」を実践。海に近く湿度の高い房総の環境にも応答する高床や外壁など、土地ならではの自然と建築の関係を再構築した。



北側外観。コンクリート
を使用せず、19本の小径
鋼管杭を基礎とし、その
上に平屋の木造建築をの
せた。

浮くわけ >>

- ・湿気対策（室内のアートを保護）
- ・眺望の確保
- ・杭頭に上部構造をのせる
- ・地中の水を受け流す
- ・コンクリートを使わない



1

表面の不安定な地面に頼らず
深い地層で建物を支える。

Case Study 3 **Villa Boso**

地下7mの 古層から 建ち上がる

春の陽光を浴びた海が、視線のはるか先できらきらと輝いている。建物から海岸線までのあいだは見わたす限り鬱蒼とした森が続いていて、およそ視界に人工物が入ってこない。この奇跡のような絶景の立地に惚れ込み、築20年の中古住宅を購入したクライアントが、建築家の寺本健一さんのもとを訪れたのは2021年のこと。その住宅は鉄筋コンクリートの独立基礎の上に木造トラスでデッキテラスや屋根を崖から張り出した構造となっており、今の姿とはまったく違う形式の、崖上に「浮く建築」であった。

当初、クライアントはリフォームして別荘にする考えであったが、調査してみると築20年にして早くもコンクリート基礎が不同沈下し、木部の劣化も進んでおり、改修するにしても新築の7割程度の費用が必要と判明した。敷地は40年以上前に造成された別荘地の端部にあり、巨大な擁壁を建て土砂を盛って平坦に均した土地。ここで再びコンクリート基礎を採用しても、土砂が沈んでしまえば同じことの繰り返しである。

「まずはとにかく丈夫に、たとえば表層地盤に変化が生じた場合にも、建物を確実に支え続けられる構造とは何か」と寺



本さん。地質調査の結果、深さ7mほど掘れば、更新世（約285万年前から約1万1700年前）の堅牢な泥岩層に到達することがわかった。ならばその古層まで届く長さの杭を打ち込もうというのである。

「敷地は東西に細長く、更新世の支持層は東から西に向かって傾斜しています。その斜面に応じて約4mから8mまで、長さの異なる鋼管杭を打ち込んだのです。あくまで想像上の姿ですが、造成地盤の下にある200万年前の山肌、長さの異なる柱を立て、それに支えられた水平の床面をつくり出す構造を思い描いていました。三佛寺投入堂のような懸造りにも通じるイメージです」

砂漠の国で 実感した 建築の虚構性

いわば近代土木技術によってかさ増しされた偽りの地形の上に「浮く」建築とも呼びたくなるコンセプトだが、この発想に至るまでには、寺本さんの職歴が大いに関係している。東京理科大学の大学院修了後、オランダの設計事務所を経てシーラカンスタンドアソシエイツに入った寺本さんは、2012年からの9年間、UAEのドバイを拠点に設計活動が続けた。砂漠の地を造成し、急拡大を続ける超人工都市。ここで手がけた建築のほとんどは、Google Earthで敷地の衛星写真を10年ほど

1／海拔100m、海岸線から1.5kmの高台に立つ。南側には原生林の先に太平洋が広がる。
2／北側ファサード。東西に長い幅およそ24mの切妻のボリューム。
3／西側の妻面のテラスを見る。床レベルは地面から1.6m。

3



ランドセメントでつくるのが合理的という常識すら疑ってかかること、世界の標準化に抗うことの大切さです」
21年、寺本さんはUAEで設計事務所を共同経営していたワイル・アル・アワールさんとともに、第17回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展にアラブ首長国連邦館の代表として出展。砂漠で建築を立ち上げるには。その問いを起点に、UAEの

砂漠に広がる塩分を含んだ平地「サブカ」をリサーチし、海水淡水化プラントの産業廃棄物に着目した。そこに含まれる酸化マグネシウムを用いた代替セメントの研究に出会い、約2500個のサンゴ型ピースで空間を構築するインスタレーション「Wetland」へと展開。見事にグランプリの金獅子賞を獲得した。その土地で廃棄物として

て処理されているもののなかから資源の素を発見し、地域の実情に合わせて建材を開発する。世界的に増え続ける建築需要と、環境への過大な負荷問題に対する、じつに革新的な提案である。

コンクリートを 使わない建築

寺本さんはその後、ドバイでの活動に区切りをつけて日本に帰国。とくに

地縁も何もなかったそうだが、Google Earthで関東圏の海岸沿いをひととおり観察した結果、房総半島の風景が気に入りに、千葉県勝浦市内に拠点を定めた。世界屈指の人工都市から森と海に囲まれた静かな集落へ。美しいビーチを歩き、民家や寺社をめぐり、時には近隣のいすみ市に住む友人アーティストの農地で草むしりを手伝う。そんな日々のなかで出会ったのが、房総の別荘のクライアントであった。現代美術のコレクターであり、作品とともに週末を過ごす空間を求める依頼者に対して、建築家は基礎の鋼管杭を露出させた小さな模型を使ってそのコンセプトを説明した。さいわいクライアントは理解を示してくれたので、寺本さんはさらに、この別荘において、コンクリートをいっさい使用しないという制約を自らに課した。

「ヴェネツィア・ビエンナーレで現代のコンクリート社会に対する一種のアンチテーゼを提示して高く評価されたわけですからね。実際、海外向けにはこの房総の別荘をZero-Concrete Architectureと名づけて紹介しています。セメントは製造時に大量の二酸化炭素を排出します。ヴェネツィアではその前提を反転させ、二酸化炭素を硬化反応に取り込むセメントを提案しました。でも習慣というものは簡単に抜けないもので、外構工事の際に駐車場脇につくったプロパンガスボンベ置き場の床面に、うっかりモルタルコンクリートを流し込みそうになって、現場で急遽納まりを見直す、ということもありま



コンクリートを使わず
湿気から守り、
森と海への眺望を得る。

Case Study 3 **Villa Boso**

森林の国の新しい ヴァナキュラー

「考えたみれば、木造だろうが鉄骨造だろうが、基礎にすらまったくコンクリートを使わずに建築物をつくるというのは、現代において一般的にはありえないことである。例外があるとすれば日本の伝統木造建築に見られる石場建てだろう。礎石の上に柱を置き、基礎と土台を固定しない構法である。房総の別荘はこの伝統技術の精神に倣い、鋼管杭の頭部と床の間に、剛性の高いトラス高床層を設けて足固めとした。杭頭と木土台は建築基準法上ボルトで緊結しているが、構造システムとしては摩擦力による水平力伝達も可能である。つまり19本の鋼管杭の上に、木造建築がぽんと置かれているような構造なのである。」

さて、基礎構造についての説明が長くなってしまったが、建物本体を見ていこう。壁面は黒く塗装された「さらご下見板張り」で、道路側に面した側は極端に開口が少なく、別荘というよりは納屋もしくは蔵のような静けさをもつ外観。しかも床は地面から1・6m浮かせた高床式となっており、一見すると、東大寺正倉院や伊勢神宮正殿といった歴史的建造物、あるいは周辺集落の民家のスタイルを意匠的に援用したふうに見えなくもない。しかし実際には、さらご下見板張りは、地域産のスギ板を用い、湿度による木材



5

撮影／西川公朗

6

撮影／西川公朗



5／スペース a からの南側の眺望。

6／スペース a からテラスを見る。壁面となめらかに連続するサイクロイド曲線の天井。

4／南側外観。外壁仕上げはスギ板のささらご下見板張り。戸袋のみ、一部に矢羽根張りを採用し、変化をつけた。



4

の膨張収縮によって壁内の通気を促す工法でもある。また敷地は森林に囲まれた土壌のため湿気が多く、内部の美術作品を守るためにも、床面を上げて通風をよくする必要があった。ポストモダン的な意匠の援用ではなく、環境性能的・経済的な合理性があつてのこの外観なのである。

「じつをいうと、この外観には元ネタがありましてね。自宅近くの海岸に、お祭りの山車を納めるための、ささらご下見板張りの小さな倉庫が海に向かって立っているんです。40年ほど前の建物らしく、今回の外装も『40年後にはこの倉庫のようなたたずまいになるはずだ』と、クライアントに説明しました。あの感じはいいですよね、と意見が一致したんです」

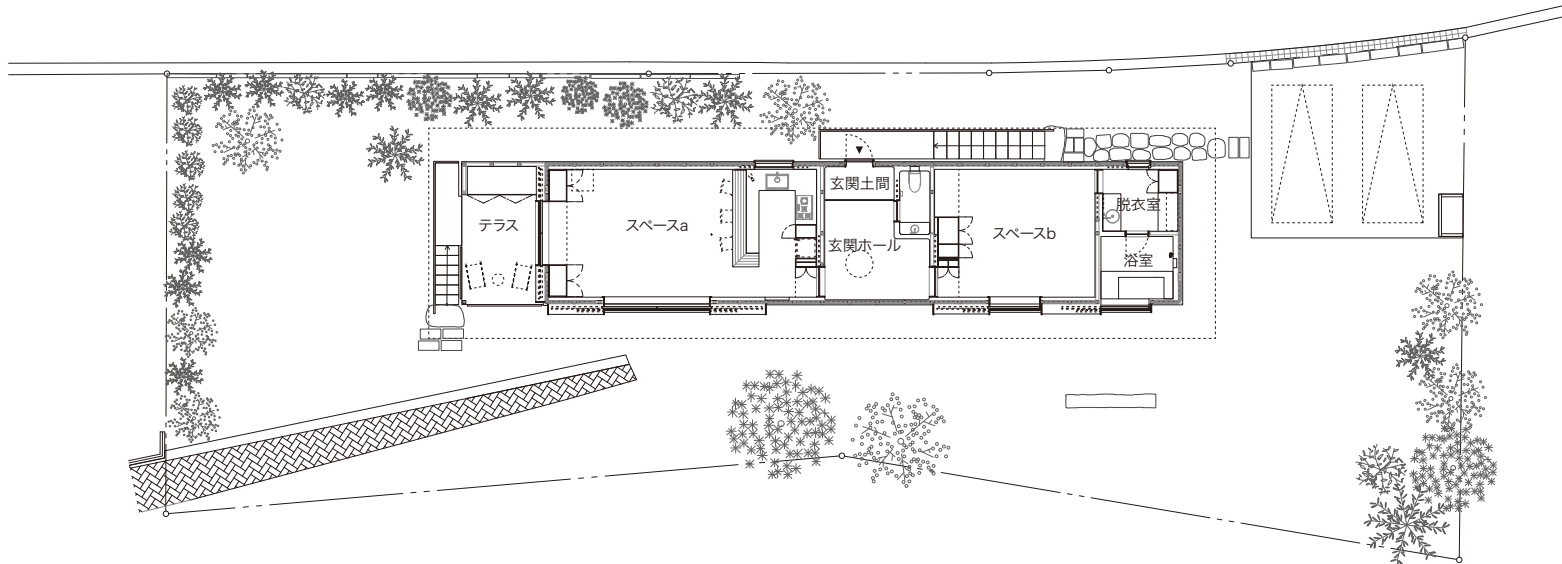
では最後に室内に入ってみると、雰囲気は一変。隅部がやわらかく塗り込められた土壁の空間に丸い天窓からほのかな光が差し込み、まるで静謐せいひつで小さな礼拝堂のよう。リビングに抜けると、サイクロイド曲線を描く天井と白い壁に包まれた、薔の中むぎなにいるような空間が広がる。そこに穿たれた額縁のようなプロポーションの窓。なるほど、こうして一枚の風景画のごとく景色を窓で切り取ってみると、ちょうど絶妙なバランスのよい位置に水平線がくるのがわかる。

コンクリートを当然の前提とする建築のあり方を問い直しながら、湿気を防ぎ、ベストな眺望を得る。森と海に包まれたこの別荘は、さまざまに「浮くわけ」を秘めて、静かに佇んでいる。

平面図

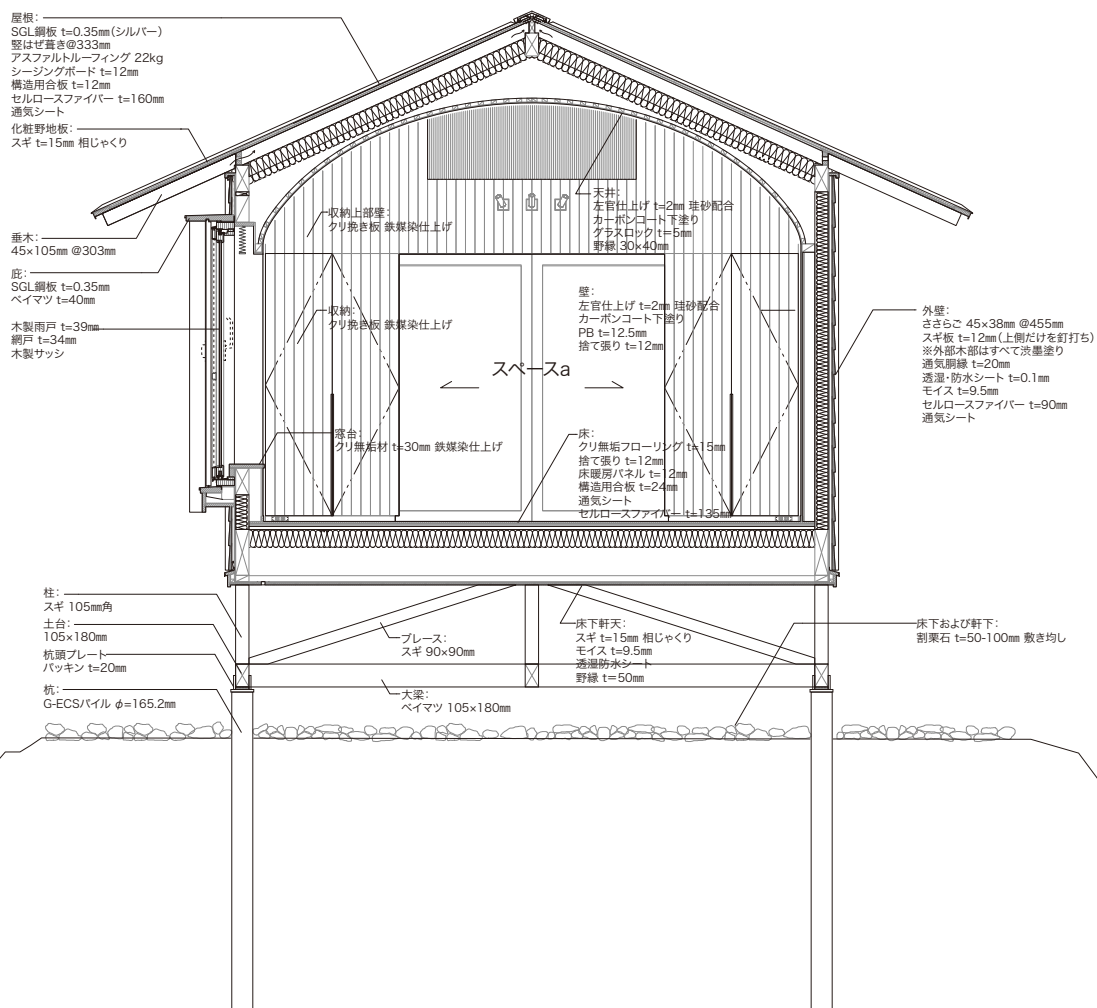


1/250



断面図

1/60





南側外観。もともとの地形が東から西に傾斜していたことがわかる。

房総の別荘

建築概要

所在地	千葉県
主要用途	別荘
設計	寺本健一 / office of Teramoto
構造設計	Graph Studio
構造	木造在来軸組工法
基礎	杭頭突出鋼管杭
施工	TK base house
階数	地上1階
敷地面積	604.83㎡
建築面積	119.76㎡
延床面積	108.58㎡
設計期間	2023年4月～12月
工事期間	2024年1月～12月

おもな外部仕上げ

屋根	SGL鋼板 t=0.35mm 壁はぜ葺き
外壁	スギ板 t=12mm ささらご下見板張り (一部、目板張り)
開口部	木製サッシ
外構	割栗石敷き 均し、芝生

おもな内部仕上げ

床	床暖房対応クリ無垢材 t=15mm
壁・天井	機能性柿渋塗り壁 t=2mm

Teramoto Kenichi

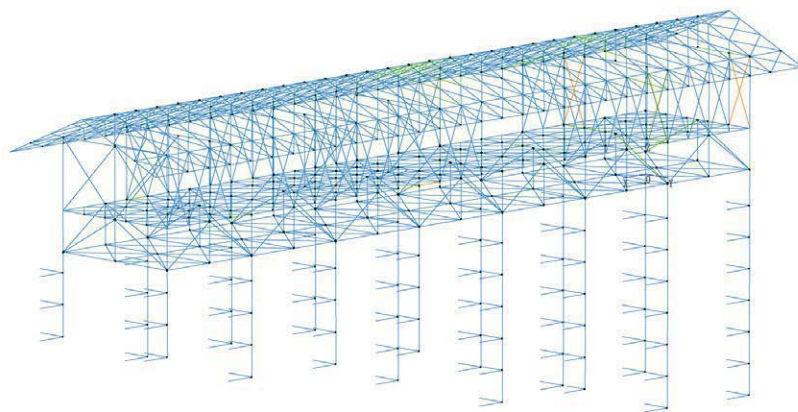
寺本健一



提供／office of Teramoto

てらもと・けんいち／1974年埼玉県生まれ。1998年東京理科大学理工学部建築学科卒業。2000年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程(小嶋一浩研究室)修了。00～02年Neutelings Riedijk Architects(ロッテルダム)。02～12年シーラカンスアンドアソシエイトウキョウ。12～21年ibda design(後にwaiwaiと改組)共同主宰(ドバイ)。21年office of Teramoto設立。おもな作品＝第17回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展UAE館「Wetland」(金獅子賞)、「Havy Jameel」(21、ジェッダ)。

構造解析モデル



安全率(断面検定比図)

表示部材: 柱, 梁, プレース, 壁, 床安全率の凡例

Input : katsullkui04.inl
Output : katsullkui04.rat
Focus : 13.000 2.000 0.000
Phi=10.000 Theta=45.000
R=1000.000 L=15000.000
Dfact=100.000
Mfact=0.500

■ : ≥1.0
■ : 0.9～1.0
■ : 0.71428～0.9
■ : 0.7～0.71428
■ : 0.6～0.7
■ : 0.5～0.6
■ : <0.5

傾斜した泥岩層を支持層としたため、東西で異なる長さの鋼管杭を打ち込んでいる。



杭頭部のディテール。杭は地上面から300mm立ち上がり、高床層の木造トラスと金物で固定。

Special Feature
Why it floats
Case Study

4

near and far



河川沿いの敷地にふわりと持ち上げられた住宅「近くと遠く」。浸水対策や眺望、工作や庭仕事を楽しむ暮らしといった複数の条件から導かれた浮かぶ建築は、周辺の環境やコミュニティとの新たな関係を生み出している。窓辺に漂う植物や小動物の気配、通りすがりの人との会話。建築が地面から少し離れることで、人や自然、地域との距離感がやわらかく編み直されていく。



東側外観。奥には中学校の校庭が広がる。第2期工事にて、中央の扉には手前の坂路からブリッジが接続する予定。

浮かぶ住まいが、近所の風景を編み直す



浮くわけ >>

- ・水害対策（川沿い）
- ・眺望の確保
- ・庭と作業場（施主の趣向）
- ・地域コミュニティとの接点
（結果的に通過する人との接点）
- ・コンクリートの使用量を減らす

初夏、シマトネリコの白い花が咲き、キッチン窓から甘く爽やかな香りが漂ってくる。仲秋の頃には、金木犀がオレンジの花をつけ、今度は南の窓から甘い香りが広がる。初冬には、クロガネモチの木に真っ赤な実がなる。住人は、窓の縁に腰掛けて、猫と一緒に日向ぼっこしながら、小鳥が実をついばむ様子を眺めている。「近くと遠く」では、建物が「浮く」ことで人や動物、植物のあいだに豊かな関係が生まれている。

窓を開けることや、縁に腰掛けることは、あくまで住人の主体的な行動である。しかし「浮く」理由を考えるなかでみてきたのは、その関係が、住人との対話を通して生まれた設計そのものにあるということだった。住人にも同席してもらい、この住宅作品の設計を手がけた、RUI Architectsの板坂留五さん・周戸南々香さん、西澤徹夫建築事務所の西澤徹夫さんに話を聞いた。

こんなところに なぜ住宅が

「近くと遠く」は、清洲城に面して流れる五条川に沿って、城から北へ15分ほど歩いた場所にある。敷地は、堤防のすぐ内側にあり、南に中学校、西に野球グラウンドやテニスコート、北に畑が広がり、ぼつんとこの住宅だけが立っている。以前は、この土地に型式住宅が立っており、河川側に1軒、南側にも数軒の住宅があった。しかし、

1985年頃には空き地になり、90年頃の護岸改修で河川が拡張されると、堤防がセットバックして現在の状況が生まれた。住人がこの土地を入手したのは、河川改修後の2003年のこと。本格的な工作や園芸を存分に楽しめそう。周囲に何もない自由さに惹かれ、土地と中古住宅を購入した。

しかし、それから約20年が過ぎて住宅の建て替えを考えたとき、大変なことが起こった。接道していた南側の道が道路台帳から消え、建て替え不可の土地になっていったのだ。行政と協議が重ねられ、河川側の道路（1項1号道路）からのアクセスを念頭に、坂路の所有者を整理。但し書き通路（建築基準法第43条2項2号）の許可見込みが得られるのに、約1年。ようやく設計が始まった。

住宅が浮く理由

家族構成は、もともと両親と長女、長男、次女の5人だが、長女と長男はすでに家を出ているので、この家は3人暮らしだ。長女と板坂さんは東京藝術大学出身で、同期の友人。この関係



1

1／敷地の東側を流れる五条川の対岸からの遠景。堤防の上に浮かんでいるように見える。

が設計依頼につながった。設計が始まった頃のことを板坂さんは次のように話す。「私たちが設計案を示すたびに、住人が庭の図面や家具のスケッチを描いてくれたことにはとても驚きました。建て替え前の住宅には自作の家具もあった、ものづくりなどがライフスタイルの一部になっていることを実感しました」。屋根付きの工作の場やできるだけ広い庭があることが、この家族にとって重要な意味をもつようだ。

また、「浮く」理由としては、予算上の配慮もあったという。「コンクリートの基礎は工事費のなかでも大きな割合を占めるので、できるだけその量を減らすことを考えました」と西澤さんは

話す。わずか4本の鉄骨柱が、約13・7m×5mの木造を支える混構造が採用された。

防災も重要だ。ハザードマップでは、河川の氾濫で1階の浸水が想定されている。このほか、住人は、当初リビンクを2階にするか、寝室を2階にするか迷っていたというが、全室が2階なら迷う必要もないし、どの部屋からでも五条川やグラウンド、さらにその向こうの山並みへの眺望が得られる。堤防を散歩する人から眺められる心配もなく、視線もずらすことができる。こうしてみると、この住宅が「浮く」理由は、活動の場の確保、コスト、防災、眺望、視線の調整といった複数の条件に同時に応答した結果であることがわかる。

住人も「近所付き合いのない場所のようにみえますが、人通りは多いですし、近隣の方もよく散歩されます。その際、工作や庭の木々が会話のきっかけになることがよくあります」と話す。結果として「浮く」ことはコミュニケーションの形成にも寄与しているようだ。

小上がりが 連なるプラン

敷地には多くの木々が生えていたが、建て替えにあたって、シマトネリコやクロガネモチ、金木犀、月桂樹、そして柚子の木を残すことにした。建物は、その木々を避けるように敷地や方位からやや角度をふって配置されている。そのうち、シマトネリコとクロガネモチは背が高い。そこで、2本の木々



3 2



Case Study 4 **near and far**

4

青緑の鉄骨フレームに
オレンジ屋根の家型がのる。
軒裏は鮮やかな青。

2／ピロティから1階玄関
間を見る。庭仕事のため
の水場が用意されている。
3／南側外観。2階の階
高は2.4 mと低めに設定。
窓から脚を出して腰掛け
ることできる。

4／北側からピロティを
見る。庭仕事の準備が進
められている。





室内は小上がりのあるワンルーム。
収納を確保しつつ、
ゆるやかに分節される。

5

Case Study 4 near and far

浮くことで 生まれる 視線の操作

の緑を眺めるように窓が設けられた。玄関や階段は中央西寄りに置いたため、中央にキッチン、リビング・ダイニングや水まわり諸室を設け、ふたつの寝室を両端に置いている。住人が床に座る生活や段差のある生活を希望したことで、狭い面積でもできるだけ収納を設ける意図から、リビング・ダイニングや寝室は収納のある小上がりを設けた。小上がりは、水まわりの配管スペース、コンセントの配線のスペースも兼ねている。「浮く」ことで木々と対応する窓の位置が決まり、またコアの位置から間取りが決まっていた。

2階の床の高さは、防災を前提としながらも比較的抑えられており、基準地盤面から2・4m。頭をぶつけず、自家用車が停められる程度の高さに抑えた。階段は10段。このことが、1階につくられる玄関の面積を減らすことに一役買っている。

2階の小上がりの高さは40cm。河川側はキッチンの棚の上から腰窓を設け、グラウンド側は遠くの住宅団地を避け、グラウンドに意識が向くように下窓が設けられた。朝日が差し込む河川側は屋根庇を省略して、空も景色に取り込む。棟の位置や屋根勾配も河川側とグラウンド側でずらして変化をつけた。

周辺の色彩を写す

こうした操作により、屋根はシンメトリな切妻屋根を傾けて置いたような個性の強い要素になった。色はオレンジ。もともと園芸のために使用していたレンガや土の色を写したものだという。あまり屋根が重い印象にならないよう、軒裏は鮮やかな青色を塗装したが、この色は近くの水管橋の色にも似ている。色決めの際は、現場にあつ

たブルーシートをあてて検討したという。外壁は波板を張り、少し黄色味のあるグレーだが、遠くに見える団地の外壁や中学校の外壁の色によく似ている。1階の鉄骨部分は、グラウンドのフェンスと同じ青緑色である。レンガや水管橋、フェンスから色彩を抽出した、周辺環境にびったりなじむたたずまいになったようだ。

その証拠に、「なんと、この家の土手に座って、ピロティ越しにグラウンドの野球を観戦している人がいたんです。

6

7

5/2階のリビング・ダイニング。中央に小上がりを設け、右にキッチン。正面に水まわり、その裏手に寝室1。

6/2階から1階玄関を見る。

7/寝室2の西側の窓辺。カーテンの開閉で寝室2と一体で利用することもできる。

とても驚きましたが、建物が周辺環境によくなじんでいる証拠だと思い、うれしくなりました」と住人や板坂さん、西澤さんが談笑する。異なる構造の鉄骨はもちろん、屋根や壁にも明確な個性をもたせることで、周辺環境の色彩を引き受けやすい存在になっている。

ある休日、住人が工作に勤しんでいると、通りすがりのご近所さんが「何をつくってるの」と声をかける。花を植えていると「何を植えてるの」と声をかける。建物が「浮く」ことに、周辺環境へ溶け込む色彩が重なり、多様なコミュニケーションが生み出される。それは、地面からの分離ではなく、周辺環境との関係を再編成する操作にほかならない。窓を開けたり、日向ぼっこをしたり。人や動物の行動を引き出す環境の性質を、アメリカの心理学者であるジェームズ・ギブソンは、「アフォーダンス」と名づけた。「近くと遠く」は、建物が「浮く」ことをきっかけに、たくさんのアフォーダンスが生み出される過程を示している。

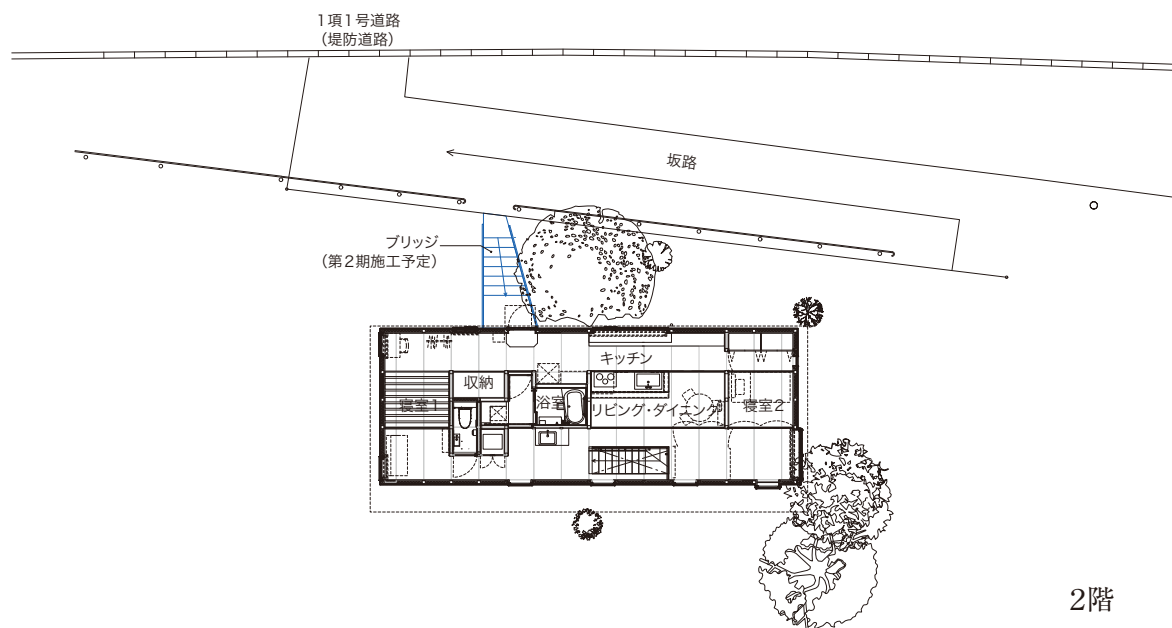


平面図

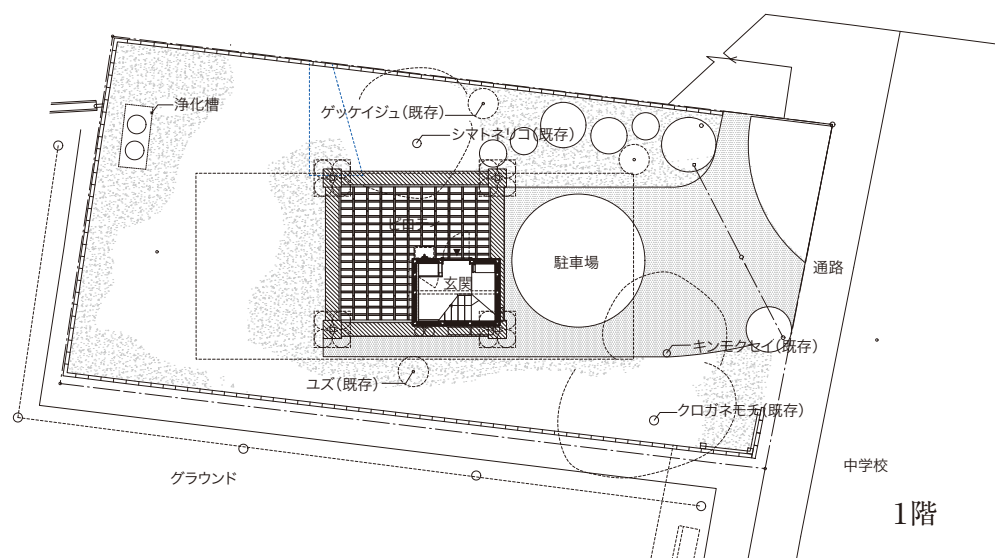


0 2 4m

1/250



2階

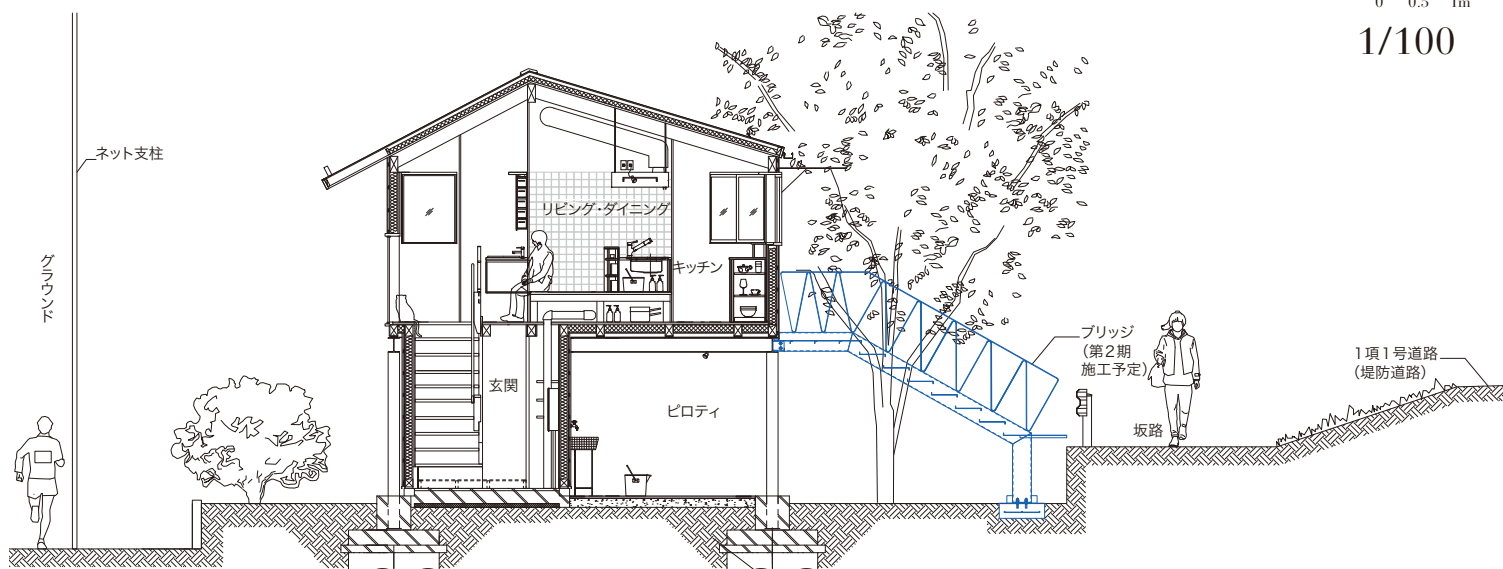


1階

断面図

0 0.5 1m

1/100





東側の堤防から見る。

近くと遠く

建築概要

所在地	愛知県
主要用途	専用住宅
設計	RUI Architects、西澤徹夫建築事務所
構造設計	小松宏年構造設計事務所
構造	混構造(木造、一部鉄骨造)
基礎	杭基礎
ファブリック	堤有希
施工	箱屋
階数	地上2階
敷地面積	275.37㎡
建築面積	68.80㎡
延床面積	105.43㎡
設計期間	2023年2月～25年3月(協議期間含む)
工事期間	2025年3月～12月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板 豎はぜ葺き
外壁	ガルバリウム鋼板 小波板
開口部	断熱サッシ
外構	タイル、コンクリート

おもな内部仕上げ

1階(玄関)

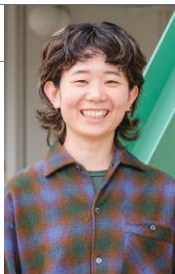
床	モルタル t=50mm クリア防塵塗装、スノコ OS
壁	PB t=12.5mm EP
天井	下地現し

2階

床	サブロクヒノキ合板 t=12mm 自然系着色塗料
壁	PB t=12.5mm EP
天井	下地現し
階段	ヒノキ無垢材 t=36mm 自然系着色塗料

板坂留五 Itasaka Rui

いたさか・るい／1993年兵庫県生まれ。2018年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、RUI Architects設立。おもな作品＝「半麦ハット」(19、西澤徹夫との共作)、「象」(25、小黒由実・西澤徹夫との共作)



西澤徹夫 Nishizawa Tezzo

にしざわ・てつお／1974年京都府生まれ。2000年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、青木淳建築計画事務所。07年西澤徹夫建築事務所設立。23年より京都工芸繊維大学特任教授。おもな作品＝「西宮の場合」(16)、「八戸市美術館」(21、浅子佳英・森純平との共作)。

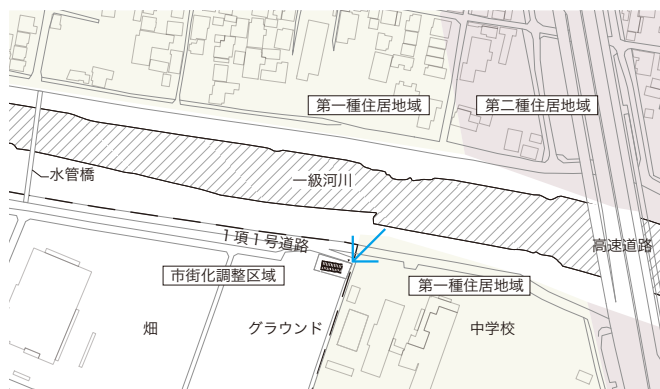


配置図



0 50 100m

1/5,000



右下／2階の小上がり収納。高さは40cm。
左下／寝室2。堤有希氏によるキルティングウォールで開閉が可能。

上／2階のキッチン。小上がりは水まわりの配管スペースや、コンセントの配線スペースも兼ねている。



「明日はもっとよいものをつくろう」と言い残し、その後、ガウディは路面電車にはねられてこの世を去った。事故の直後はまだ生きていたが、みすばらしい身なりのために浮浪者と間違えられ、タクシーにも乗車を拒まれたという。ようやく病院へ搬送された後もしばらく身元不明のままであった。それが、今世界中がその完成に沸くサグラダ・ファミリア教会の設計者の、ちょうど100年前の最期である。

本連載の第1回では、ガウディのプンティ工房で様子を紹介した。今回はその後にサグラダ・ファミリア教会の敷地内に移されたアトリエに焦点を合わせたい。

1887年、教会構内には現場事務所が建てられた。その姿は現在も確認でき、晩年のガウディはその3階で寝泊まりしていたと伝えられている。その隣には模型室や彫刻室が併設されていたが、残念ながら現存しておらず、古写真によってのみその姿を知ることができる。

模型室はガウディ自身の設計によるものであった。太陽光が室内に差し込むよう、開閉式の屋根を備えていたという。彼は石こう模型によるスタディを好み、1/100、1/50、1/25、1/10と、段階的にスケールを上げながら検討を重ねていた。同じ柱でも異なる縮尺の模型が複数残されていることから、その徹底ぶりがうかがえる。

彫刻の制作もまた、きわめて独創的であった。まずスケッチを描き、針金模型や骸骨模型でポーズを検討する。次に工房の職人や近隣の人々をモデルに起用し、三面鏡の前で多角的に姿勢と陰影を確認した。さらに写真を撮影して記録し、それをもとに粘土、石こうへと段階的に制作を進め、1/4模型から実寸、さらには拡大模型へとスケールを変えていった。

見上げたときにも自然に見えるよう、頭部と足元の比率には視覚補正が施されていた。完成前には石こう像を実際の設置位置に仮置きし、下からの見え方まで確認したうえで修正を加えたという。その方法は、まさに建築設計における模型検証と同じ発想であり、ガウディの彫刻が建築的思考の延長線上にあったことを物語っている。

しばしば、ガウディは図面を描かなかった建築家だと誤解されるが、それは事実ではない。弟子たちの証言によれば、彼はスケッチを好んで描く人物で

あった。ただし彼にとって図面は完成品ではなく、思考のための一時的な道具であった。「図面は検討のために描くもので、一時的なものだ」と考え、描きながら、つくりながら、同時に検討を進めていくタイプだったのである。さらに、設計の場と施工現場が同じ敷地内にあったため、構想、検討、施工が同時並行で進んでいたことも原因だろう。1936年から39年のスペイン内戦で図面や記録の多くが焼失したことは残念であり、その煙のなかにガウディの描いたスケッチが存在していたと思うと悔やまれる。

このアトリエには、多いときで100人を超える建築家や職人が集い、少ないときには10人ほどに縮小することもあった。工事は寄付金によって進められていたため、資金状況はつねに不安定で、賃金は週払いであった。優秀な彫刻家でさえ、時には別の職場を求めパリのロダンのアトリエへ移らざるをえないこともあったという。

それでもガウディは、人との関係を何よりも大切にしていた。「私の唯一の長所は、私のものと働いている人々一人ひとりが十分に仕事をできるよう、その能力を引き出すことにある」と彼は語っている。彼は制作者を頭ごなしに批判することはなかった。模型の誤りを見つけたときも、「これは私が言ったとおりのものとは違うな」「君も、そして私も誤解していたようだ」と穏やかに語り、最後には「では、もうひとつ新しいものをつくってみよう」と、新たな課題を示した。

その積み重ねのなかで、よりよいかたちが見出されていったのである。模型室の古写真には、よく似ていながら微妙に異なる模型が密に並ぶ光景が残されており、その試行錯誤の過程を雄弁に物語っている。一方で、彼が何も語らない瞬間もあった。思考を巡らせるとき、ガウディは腕を組み、指を交差させる癖があったという。その姿を見ると、職人たちは彼が次に発する言葉に耳を澄ませ、鋭い青い眼差しに神経を集中させた。

「明日はもっとよいものをつくろう」。このものづくりの精神は、彼の建築だけでなく、後世にサグラダ・ファミリア教会に携わるすべてのものづくりの人々に息づいており、それこそがガウディが現代に残した最大の遺産といえるだろう。



当時の石こう模型から現代の最先端3Dプリンターまでが同居している現在の工房の様子(2026年2月筆者撮影)。

アントニ・ガウディ・イ・クルネット

Antoni Gaudí i Cornet
1852年スペイン、カタルーニャ州タラゴナ県レウス市内で生まれる。銅板器具職人の家庭に生まれ育つ。78年に大学を卒業し、すぐにプンティ工房を拠点に設計活動始める。83年にサグラダ・ファミリアの二代目建築家に就任し、87年聖堂建設現場の敷地内にレンガ造2階建ての事務所を構えた。98年に一度増築し、1906年までにはさらにもう1棟を建設した。プンティ工房を出てからは、すべての建築がこの聖堂敷地内のアトリエで設計されている。26年逝去。

やまむら・たけし/1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12～15年「ミニク・ペロー・アルシテクチュール」勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。26年カタルーニャ工科大学客員研究員。博士(建築学)、一級建築士。

明日は もっとよいもの をつくろう

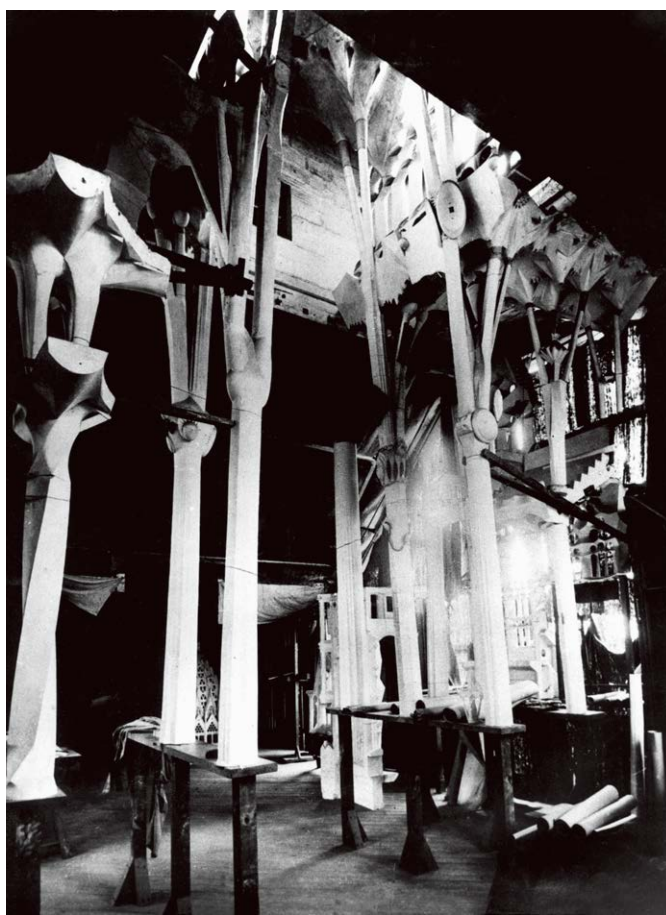
古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第13回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

サグラダ・ファミリアに 構えた ふたつ目のアトリエ

文／山村 健
Yamamura Takeshi



©Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família Foundation

模型室。中央に見える
のは、中央身廊部の10
分の1の模型。天井が
開口し、自然光で検証
できる構造となってい
た。



©Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família Foundation

アントニ・ガウディ

Antoni Gaudí

©2015 Institut Amatller d'Art Hispànic - im. 04540007 (foto Mas C-577 / 1906)



構内に設けられた設計
事務所。

©Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família Foundation



彫刻室。無数の型どり
された彫刻が所狭しと
陳列されていた。



聴竹居 下閑室 設計／藤井厚二



1

1／丘の上からの
水が、茶室の下を
くぐって流れ出て
下の池にたまり、
また流れ出ていく。
川と茶の関係は中
国の伝統の茶に由
来する。

現代 住宅 併走

第六十四回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均

(藤井厚二のポートレイトを除く)



2
3

2／右手の岩から水が落ちるように演出されている。流れに面して待合があり、その右手をまわると廻り口に至る。左手のドアは座敷（閑室）への入口。
3／廻り口。
4／廻り口は2枚の引き戸からなる。

4



ほ

とんどの人は気づきもしないが、戦前、茶室というビルディングタイプは、建築家が手を出すものではなかった。茶室は、建築家が本来手がけるべき官公庁や駅や銀行といった公共性のある建築の対極に位置し、遊芸性の高い極私的建築と社会の側が見ていたからだ。昭和に入ってから

もこの伝統は続き、実際に、戦前に建築家が依頼によって手がけた茶室は2件しかなく、堀口捨己の名作「岡田邸」(1933)と、坂倉準三の「飯箸邸」(41)だけ。

そんななか、藤井厚二は、広大な自邸(聴竹居)の一面に(下閑室)と呼ばれた茶室を、31(昭和6)年に完成させている。もちろん、自分用として。

藤井は、茶の道に通じたことで名高い広島県は福山の造り酒屋・黒鐘屋の子として生まれているから、伝統的な茶室については幼い頃より体験的に識っていたし、聴竹居の一画につくった母親のための茶室は伝統のルールに従っているが、さて、自分用の茶室はどうデザインしたのか。

伝統のなかで凝り固まったルールを、一つひとつ、はずしていく。

アプローチからチェックしてみよう。露地を歩いて待合に腰



5

現代住宅の併走

Fujii Koji × Fujimori Terunobu



7

5/右が茶室 左が座敷(閑室)。6/ドアから中を見る。

7/座敷(閑室)から踊り口を見る。左手の柱が檜の黒木の中柱。

6



かけると、伝統の手水鉢の代わりに、水道と竹筒を使い岩の竹筒を伝って小さな滝が流れ落ち、足許にたまっているように見せている。ここで手を洗い、口をすすいで世俗の汚れを落とす。落とした後、進む先はふたつに分かれ、左に戻ればごく小ぶりの玄関で、一方、踏み石を右にたどって建物の角をまわれば、茶室ならではの踊り口。

踊り口から入ると、中は、一畳台目・中板敷き・踏込床の茶室。と、あえて伝統的な言い方をしてみたが、つくりのすべてが伝統からの離脱を目指し、たとえば踊り口は、伝統よりはるかに大きいうえ、片引きの板戸をやめ、ガラス戸と内側に障子の引き違い。中板が踏込床と連続するのも異例なら、踏込床の上方に水平に板が走り、その上が2枚引きの障子というのも前例を知らない。ごく些細なことだが、炬の角に立つ中柱の檜の黒木(樹皮付きの丸太)も、例があるかどうか。

伝統の茶室では、利休のかわた、踊り口や窓といった開口部をわざと小さくし、外が見えないよう障子の高さを工夫し、自閉的な小空間をつくっていたというのに、藤井は、大きな障子を、それも開ければ外が眺められるような高さに設定し、利休が創造した自閉小空間を意識的



9

8 / 水屋から座敷（閑室）へのサービ
ス用開口。
9 / 写真7の右手
の奥の茶室（食堂
ならん）の板敷き
の間の開口。
10 / 水屋（台所）。

8



10



茶

に破り、開放性と明るさを求めた。室を味わった後、奥の襖を開けるとそこには

閑室が広がるのだが、踊り口から腰かけに戻り、小ぶりの玄関のほうから入ってみよう。

入ると、小さな板張りの部屋が待っているが、用途がよくわからない。板張りの向こうは一段高くなり、襖を開けると、先ほど入った茶室が位置する。板張りの左手も一段高く、襖を開けると、そこが閑室になっている。

ここまでたどってきて、やつと下閑室全体の間取りが次のように理解できた。

小ぶりの玄関から入ってすぐの板張りの部屋に椅子とテーブルを入れれば3畳弱の食堂となる。食堂の先は一畳台目の茶室で、左手の閑室は、4畳の座敷なのだ。とすると食堂と茶室用の水屋と便所はどこにあるかと探すと、玄関から上がった狭い板張りの踏込みの左手の手前に便所が、奥に水屋を兼ねた台所が見えないように隠されている。

下閑室の用途はお茶用とばかり思ってきたが、座敷を主室とし、台所と食堂もあり、そこに茶室を付加したひとつの住宅なのだ。

極小の住宅。利休が極小の茶

室空間を創出したことを強く意識して、極小の住宅形式を追求した成果が下閑室だった。

そう気づいて、平面図を眺めると、全体はほぼ三間四方の、いわゆる「九間」に納まっているではないか。九間は、日本の伝統的な部屋の広さの基準として知られ、一番広いのが九間で、それを4等分した4畳半が一番狭い部屋となる。一番狭い4畳半よりさらに狭いのが茶室で、利休によつて2畳まで極められていた。

藤井は、日本の長い伝統のなかで確立された九間の中に、家1軒分の機能を納めてみせたのである。

建築の面積の狭いほうの究極は一間四方だから、一間四方は建築というものの「単位」といい。それを利休は求めたとするなら、藤井は、住宅というものの「単位」を求めた、と理解していいだろう。とすれば、下閑室は、日本の住宅の単位にほかならない。

さて、最後に、下閑室の中心の部屋である4畳の座敷に入ってみよう。

不思議なつくりで、正面には床の間の代わりに浅い板が水平に延び、下は地袋状につくられている。ここを床として、花を生けたり、軸をかけ、好きな物品を並べることもできる。そし



北側から見る全景。

聴竹居 下閑室

建築概要

所在地	京都府乙訓郡大山崎町
主要用途	茶室
設計	藤井厚二
施工	酒徳金之助
竣工年	1931年
敷地面積	約3,706.81㎡(現状)
建築面積	32.56㎡
延床面積	32.56㎡
階数	地上1階
構造	木造
保存修理事業(全解体保存修理)	
	2019年11月～2023年1月
事業主体	竹中工務店
建築・監理	京都府教育委員会 文化財保護課
施工	安井空工務店、豊工務店
図面提供	竹中工務店

Profile

藤井厚二

1888(明治21)年に生まれ、東京帝国大学(現・東京大学)を出て、竹中工務店に最初の建築家として入り、朝日新聞大阪本社完成の後、1920(大正9)年、京都帝国大学(現・京都大学)に移り、以後、日本の住宅のあり方に関心を集中し、研究と実作を重ね、その成果として〈聴竹居〉を実現している。1938(昭和13)年、49歳で没。〈聴竹居〉は、木造でモダン

ズムをつくるという日本独自の表現の源となった。学生時代の吉村順三は、急に訪れたにもかかわらず、昼時になると、名店から弁当を取り寄せてくれた、と語っている。

写真提供／藤井家(小西章子)

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞＝『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」(15)で日本芸術院賞。



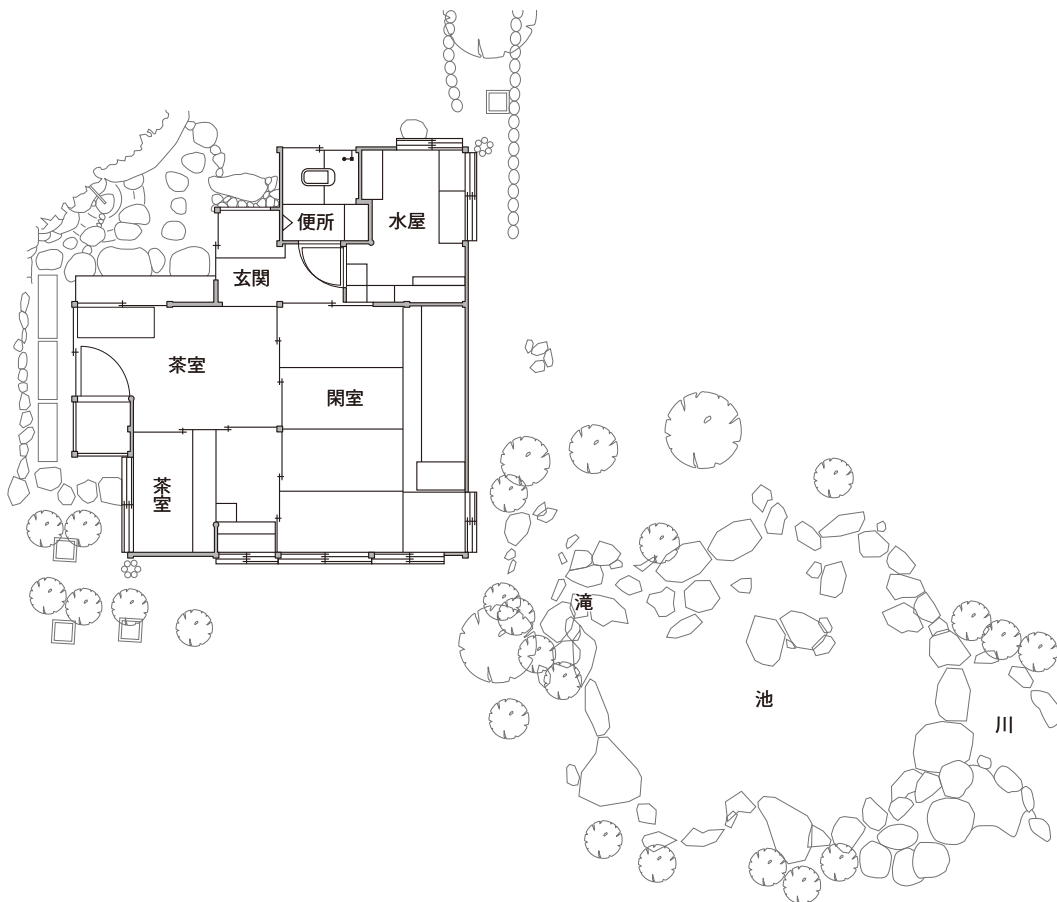
Fujimori Terunobu

平面図



0 1 2m

1/100



て右手には小さな窓があき、建物の隅が外部に通じる。右手の壁には低い位置に窓があく。いずれも障子のはめられ、低い位置からの拡散光が座敷に充滿する。天井も2段に分けられ、相互貫入を図ったつくりとなっている。

正面、壁、天井、いずれも異例な造形にちがいないが、原理は明快で、線と面からなる構成の美、にほかならない。

構成の美は、バウハウスの造形のもととなったオランダのデ・ステイルのグループの発見に

現代住宅の 併走

Fujii Koji
×
Fujimori Terunobu

かかり、代表的建築としては1924年のリットフェルトの「シユレーダー邸」が名高い。その2年後にバウハウス校舎がつけられ、5年後の31年に下閑室が出現している。

藤井厚二は、世界の20世紀建築の最先端を強く意識しながら和風の伝統に挑んでいた。堀口捨己が和風の伝統とモダニズムの造形の融合を果たしたことで史上に名高い「岡田邸」の竣工は33年だから、その2年前に、すでに藤井は同じことを実現していた。

埼玉県こども動物自然公園

Saitama Children's Zoo

「埼玉県こども動物自然公園」は広大な丘陵地で約140種類の動物を飼育する自然豊かな動物園。昭和55年（1980年）5月5日の開園以来、長年、家族連れや遠足の定番スポットとして親しまれてきたが、課題のひとつが老朽化したトイレだった。埼玉県では折しも「ジェンダー主流化」を推進中で、モデル事業のひとつとして公園の整備を行うことになり、埼玉県こども動物自然公園の利用者にアンケート調査を実施したところ、トイレに対する満足度が低く、とりわけ女性と子ども連れの不満が大きいことがわかったという。

性別、年齢、障がいの有無などにかかわらず、誰もが利用しやすい公園づくりの一環として、『誰もが利用しやすいトイレ』の設置に取り組むことになりました」と振り返る。

設計・施工一括プロポーザル方式により選ばれたのは、深谷市に本社を構える総合建設会社・古郡建設。「トイレは私たちが手がける建築の中に高い頻度で設置される空間ですが、今回のようにトイレをメインに設計し、ジェンダー主流化について深く考えたことはなかったため、あらためて学び直すよききっかけになりました」と話すのは、設計課長の眞中修さん。今回取材した2カ所のトイレをそれぞれ担当したふたりの設計者がちょうど子育て中で、利用者の立場に立った声が反映できたこともよかったと語る。

大きな キッズトイレのある 自由広場のトイレ

ひとつ目のトイレは、大きな広場（自由広場）に面し、公園の中心地に位置する。建物は中央に独立したキッズトイレ、通路を挟んだ両脇に男女トイレを配した分棟式。青いキッズトイレ棟を囲むように、角が丸みを帯びた白い2棟が立ち、軽やかな屋根が架かった外観は美しく、



右／動物自然公園の正門。
左／キリンの展示施設。



「また遊びに来ようね」につながるトイレ

従来の公園トイレに対するマイナスイメージを払拭してくれる。入口手前の右手には男女共用の広めの個室トイレ、左手にバリアフリートイレを配置。ふたつの通路を抜けると、いずれも裏手の野外ステージに通じる。野外ステージは昼食や休憩の場にもなるため、双方からアクセスしやすいという配慮だ。図面を見ると、一見、回遊性を重視したプランのように思えるが、設計を手がけた須田順子さんによると、2方向からのアクセスが必須条件だったため、もし通路がないと男女トイレそれぞれ2カ所に出入口を設けることになり、目を離れた隙に子どもがどちらから外に出たかわからなくなることを避けたかったからだという。確かに、トイレの出入口を1カ所に集約したほうが子どもを見守りやすく、屋根付きの通路は混雑時には待機列をつくる場にもなる。また、

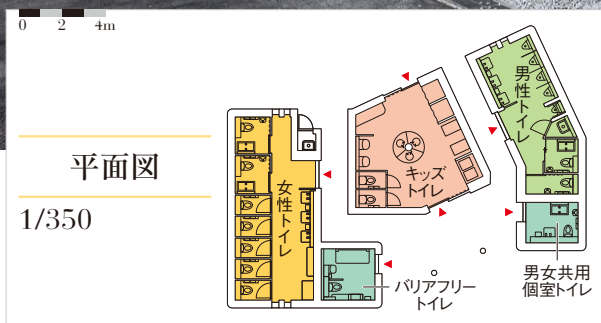
入口の手前にポーチのような屋根付きのスペースを設けたのも、子どもが安全に待つ場所を確保するためだそうだ。「待機場所があれば、園児を連れてきた先生方が見守りを分担し、半数の子どもが先にトイレに行き、もう半数は手前で待つこともできます」と須田さんは言う。

キッズトイレの内部は、黄色を基調にした愛らしいデザイン。3段階の高さを設けたアイランド型の洗面台を中心に、幼児用の大便器・小便器、オムツ替えコーナーなどを配置。壁に掛けた鏡も身長差に応じて使えるように高さを変えるなど、かゆいところに手が届く配慮が満載。このエリアには空調も完備している。

男女トイレも鏡やカウンターなど、随所にアールを生かしたデザインがやわらかさ、楽しさを演出した居心地のよい空間だ。さらに、バリアフリートイレ

自由広場のトイレ

Toilets
in
Liberty
Square

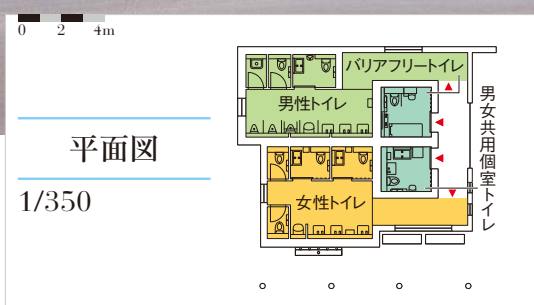


外観

園内の中央部の自由広場にあるトイレ。奥に野外ステージがあり、入口は2方向。

噴水広場のトイレ

Toilets
in
Fountain
Square



外観

正門付近の噴水広場にあるトイレ。集合場所になるように屋根が張り出している。

自由広場のトイレ



Toilets
in
Liberty
Square



入口

正面にキッズトイレ、右手に男女共用個室トイレ、左手にバリアフリースペース。右奥の通路の先に男性トイレ、左奥の通路の先に女性トイレがある。壁面にはガラス工房で不要になったガラスなどを使ったタイルを使用。

男性トイレ

入口には外から視線を通さない衝立が立てられている。



入口

野外ステージ側からのアプローチ。2方向からトイレにアクセスすることができる。



小便器

小便器間には隔て板。利用時の心理的負担を軽減する配慮。

個室

ベビーカーのまま入れる広めの個室。ベビーシートなども設置。

女性トイレ

軽やかな印象にするため、鏡や洗面台の角は丸くなっている。





キッズトイレ

中央に洗面台、右手にオムツ替えの台や個室、左手に子ども用小便器などがある。

キッズトイレ

洗面台や鏡は子どもの身長に合わせて3パターンの高さのものがあ

キッズトイレ

子ども用の小便器と大便器。個室の壁は親が中を確認できる高さ。



バリアフリートイレ

車いす対応のトイレ。異性介助時のプライバシー配慮などのため、視線をさえぎるカーテンも設置。



男女共用個室トイレ

性別を問わず、誰もが利用できるトイレ。



通路

トイレ待ちのときに屋内で列をつくらることができる長い通路。ベビーカーでの利用にも配慮した幅を確保。



女性トイレ

個室の使用を知らせるライトが個室前に設置されている。



男性トイレ

小便器間に隔て板。子ども用の高さの洗面台もある。内装には埼玉県産の杉材を使用。

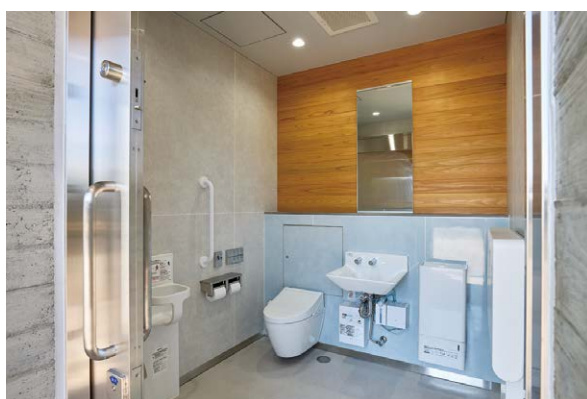
個室

荷物を置ける低いライニング。プライバシー性に配慮した天井までのトイレブース。



男女共用個室トイレ

性別を問わず、誰でも使用できるトイレ。バリアフリートイレとは別に設置。



バリアフリートイレ

車いす対応。オストメイトにも対応している。衛生的な非接触スイッチを採用。



噴水広場のトイレ

Toilets
in
Fountain
Square

埼玉県こども動物自然公園

Saitama Children's Zoo



左／自由広場のトイレ。右／噴水広場のトイレ。

建築概要

所在地	東松山市岩殿554
事業主	埼玉県(埼玉県知事・大野元裕)
主要用途	動物園(便所)
設計施工	古郡建設
敷地面積	320,000㎡(北園のみ)
建築面積	145.74㎡(自由広場のトイレ)、 111.12㎡(噴水広場のトイレ)
延床面積	124.34㎡(自由広場のトイレ)、 105.72㎡(噴水広場のトイレ)
構造	鉄筋コンクリート造、 一部木造(両トイレ共に)
設計施工期間	2024年10月～2026年2月

おもなTOTO使用機器

●キッズトイレ	
床置床排水大便器(幼児用)	CS300B
幼児用暖房便座	TCF40
壁掛壁排水小便器(幼児用)	U310GY
小便器自動フラッシュバルブ	TEA62ADYR
ハイドロセラ・フロアキッズ	AB545KA
ベッセル式洗面器	LS703
電気温水器	REAH03B1RS26MK
自動水石けん供給給	TLK07S08JA
●女性・男性トイレ・男女共用個室トイレ	
壁掛大便器フラッシュタンク式	UAXC3C1A
ウォシュレットPS2A	TCF5534AU
棚付二連紙巻器	YH701
インテリアパーI型600	TI12C6
壁掛壁排水自動洗浄小便器(男子)	UFS900JS
壁掛ハイバック洗面器	LSE135ACR
クリーンドライ吸引・高速	TYC430WJ
シングルフック	YKH52AR
ベビーシート	YKA25N
ベビーチェア	YKA15S
ハイドロセラ・フロアPU薄型	AB680BR
管理清掃用リモコン	TCA393
●バリアフリートイレ	
コンパクトバリアフリートイレバック	UADAK21R1A1ASD1BB
ウォシュレットアブリコットP	AP2AK
TCF5841AUPR	
ハンドドライヤー高速タイプ	TYC320W
収納式多目的シート	EW520ARN

は、音や光などの感覚刺激が苦
手な発達障がいや知的障がい、
精神疾患のある人が心や体を落
ち着ける「カームダウンスペー
ス」を兼ねており、こうした障
がいのある子どもと親と一緒に
入ることも想定。中ほどにカー
テン、壁にアートを設置したの
もこのためで、須田さんによれ
ば、「子どもが10代以上ともなれ
ば、親子であっても用を足す姿
を見られたくはないので、カー
テンで仕切って『絵の中の鳥の
うち、目があるのはどれかな』
といった具合に会話すれば、楽
しみながら待てます」とのこと。
須田さんは今回のトイレ設計
を通じて感じたことをこう話す。
「親子や子どもだけでなく、障
がい者や高齢者、性的マイノリ
ティなど、すべての人に配慮す
るという視点を大切にしました
が、その塩梅が難しかったです。
一方の人にとっては便利なこと
がもう一方の人にとっては不便
になるといったケースが起こり



埼玉県
公園スタジアム課
公園事業担当
主幹(令和7年度時点)

堤 雄一郎



古郡建設
民間営業部
設計課長

眞中 修



古郡建設
民間営業部
設計課

須田順子



古郡建設
民間営業部
設計課

真下祐輔

Tsunemi Yuchiro

Manaka Osamu

Suda Junko

Mashimo Yusuke

もうひとつのトイレは正門を
入ってすぐの噴水広場にある。
入退園時に立ち寄る人が多く、
公園内のトイレのなかでも利用
率が高い。
外観は片流れの大きな屋根と
外装材に用いた埼玉県産の杉材
が目を引き、シャープさと温か
みを兼ね備えたデザイン。正面
から見ると、大きく左に延びた
屋根の軒下に幼児用手洗器とベ
ンチを配したスペースがあり、

子どもの待機場所を確保するこ
う原則はここでも守られてい
る。
設計を担当した真下祐輔さん
も、親子連れで同園を何度か来
訪したことがあり、まず清潔で
安心できるトイレをつくりたい
と考えたと語る。それともう1
点重視したのが「並びやすさ」
だ。
「設計に際し現地を訪れたとこ
ろ、ちょうど遠足シーズンだっ
たため、駐車場にはバスが40
50台止まり、園内は子どもたち
であふれ返っていました。トイ
レも大混雑で、先生方がとても
大変そうな様子を目の当たりに
したんです。そこで、手前の目
視しやすい場所にバリアフリー
トイレと男女共用個室トイレ、

あえて奥まった位置に男女トイ
レを配することで、屋内で待機
列がつかれる長い通路スペース
を確保しました」と真下さん。
もうひとつ、真下さんがこだ
わったのが、男性トイレの小便
器の間仕切り。便器の高さ程度
の間仕切りはよく見るが、ここ
では床から天井近くまでの高さ
の隔て板で仕切られており、よ
り独立性が高まっている。真下
さんによれば、自分自身も隔て
壁なしで両脇に人がいるあいだ
で用を足すのは非常に抵抗を感
じることがあるという。かなり
小便器から離れて立つ人もいて、
こちらが不安になる場面もある。
自宅の個室で便座に座って用を
足す男性が増えたことも影響し
ているのかもしれない。

今回、ほかの若手社員たちと
も議論を交わしたという眞中さ
んは「自分の若い頃と比べても
だいたい感覚が違っていて、父親
がベビーカーで男性トイレに入
るのは当たり前だし、子どもが
いるんな所を触るのが嫌だから
衛生面が気になるとか、今はそ
んな細部まで配慮して設計に盛
り込むべきなのかと気づかされ
る点が多かったです」と語る。
今後も同園のトイレのリニュ
ーアルは継続して行われる予定
で、そのうちの1カ所はすでに
古郡建設が契約済み。もうじき
着工だという。堤さんは「今回
非常にいいものができたので、
ハードルが上がってしまいまし
た」と笑うが「似たようなもの
をつくってシリーズ化したくは
ないので、より個性を際立たせ
た、まったく別なものを考えて
います」と眞中さんは自信をの
ぞかせる。誰もが快適に使える
トイレが増え、公園の魅力も増
していくにちがいない。

Water Works - in the Flow of Making

TOTOギャラリー・間で、ベルリンを拠点にする
建築家9人のコレクティブ「ラウムラボア・ベルリン」の展覧会を開催します。
設立から25年余り、市民を巻き込む実験的な手法で
都市の課題を鮮やかに変容させてきました。
今回の展覧会では「水」をテーマに、水の循環や水上利用の可能性を探究するとともに、
彼らの思い描く水辺の世界を提示します。
展覧会に先駆け、彼らの眼差しを感じとれる一通の手紙が
冬のベルリンから届いたので紹介します。

Water Works - in the Flow of Making ラウムラボア・ベルリン

TOTOギャラリー・間で 御中

拝啓

こんにちは、ラウムラボアです。東京での展覧会をご依頼いただきましたが、まずはこの書簡にて、現時点で私たちが考えていることをお知らせします。

ここベルリンでは厳しい寒さが続き、今シュプレー川は凍っています。「ルンメルスブルク湾」と呼ばれる、普段は船上居住区となっているエリア一帯でスケートが楽しめます。ベルリン市内で家賃を払えなくなった約150人が、手づくりのハウスボートでここに暮らしています。水上車両の技術検査を義務付ける法律がないので、誰もが古い錆びた艇の上になんでもつくれるのです。唯一のルールは、防犯上、つねに誰かひとりには船に残らなければならぬことです。自由に外出して行動できるように、ルンメルスブルク湾の住人たちは船をつなぎ合わせて、群れとして航行するようになりました。そうすれば、それぞれの「浮島」にひとりだけ残っていれば済むわけです。これは

家賃が高すぎる過密都市にとって、すばらしいアイデアだと思いませんか？川が凍るというめったにない機会には、湾の周辺にある高級新築マンションに住む人々と、流動的な公共空間に暮らす不法占拠者たちが交じり合い始めます。なんとすばらしい光景でしょう！ハウスボートのあいだを縫うように、日差しのなかでスケートを楽しむ親子。氷の上でショッピンングカートを引いて買い物に出かける、ハウスボートで暮らす家族。私たちは氷の上でスピンしながら、このアイデアを日本にもっていかうと考えたのです。

私たちは建築家として、多様なコミュニティ、第三の自然、多義性や矛盾を孕む都市環境の不明瞭さのなかで活動することを好みます。私たちはこれらすべてのことと向き合い、出合いの空間を創出しなければならぬと確信しています。しかし、人間が偶然出会うだけでは不十分なのです。人々のあいだに強靱な信頼を築くには、実験場として設計された予行練習のための空間、つまり絶え間ない都市の変化に対応し、交流を促進するための枠組みが必要なのです。そのなかには、凍てつ

いた湾を占拠するような、ボトムアップのアイデアから生まれるものもあります。また、コミュニティ活動を通じて生まれるものもあります。しかし、われわれを本当に既存の枠組みから解放するものを生み出すには、ポリティカルな建築とデザインを通じた活動、分野横断的な学習環境、環境・社会に対する意識、そしてそれらを提案し実現するデザイナーが必要なのです。

「Water Works - in the Flow of Making」はすべての年齢層が楽しめる展覧会であります(二人親もお子さんも)一緒に！

「Water Works - in the Flow of Making」は公共浴場のような場所であり

「Water Works - in the Flow of Making」では私たちのアイデアを集めて提示し、多様な規範が混在する循環的かつ参加型のパフォーマティブな学習環境において、知識を共有し交錯させます。

興味をもっていただけならうれしいです。9月にお会いしましょう。

2026年2月
ラウムラボアより 敬具

and more



関連 書籍

水のプロジェク ラウムラボア・ ベルリン



Present!

同封の「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方の中から、
抽選で5名の方に
プレゼントいたします。

ベルリンを拠点に世界で活動
する建築家9人のコレクティブ、
「ラウムラボア・ベルリン」の日本
初となる作品集です。多岐に
わたる活動のなかから、「水」
をテーマにしたプロジェクトを
収録しています。TOTOギャ
ラリー・間での展覧会に先駆
けて東京で行った、ワークショ
ップの様子も紹介。ボトムアップ
や対話を通して「みんなの場
所の使い方」を見出す、リサー
チに裏打ちされた自由な発想
と、実践が詰まった1冊です。

著者	ラウムラボア・ベルリン
定価	3,960円 (本体3,600円+税10%)
体裁	B5判変型(250×182mm)、 ソフトカバー、176ページ、 和英併記
発行月	2026年9月
発行元	TOTO出版



TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
FAX／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日・夏期休暇、
年末年始、展示替え期間
入場料／無料

<https://info.jp.toto.com/gallerma>

TOTO GALLERY・MIA

ラウムラボア・ベルリン

raumlaborberlin

ラウムラボア・ベルリンは、都市環境の不確実性のなかで活動
するコレクティブ。空間を社会の相互作用の産物ととらえる共
通認識と、都市実践への関心をもとに1999年に結成された。9
人のメンバーは、建築家、アーティスト、パフォーマー、発明家、キ
ュレーターとして、さまざまな活動領域を切り拓いてきた。彼らの
実践手法は、状況に即した身体的で行動志向的なものであり、
開かれた公平なプロセスを通じて空間を共同で創造することを
重視し、建築、都市計画、芸術の領域を横断して活動している。
シェリング建築賞(2004年)、スウェーデン建築賞(15年)、ローラ
ンド公共空間芸術賞(21年)、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建
築展金獅子賞(21年)、オプス舞台美術賞(22年)、DAM建築
書籍賞(24年)、タボリ賞(ドイツ連邦劇場賞)(26年)など、数多
くの賞を受賞している。



©Constanze Flamme



©Tea Maria

Working on Common Ground

コモンの場をつくる

(コンボ プリシユティナ, 2022年)



©Pierre Adenis

Floating University

フローティング・ユニバーシティ

(ドイツ ベルリン, 2018年)



©raumlaborberlin

Dialogue as Form

ダイアローグ・アズ・フォーム

(イスラエル テルアビブ, 2019年)



©raumlaborberlin

Bathing Culture

公共浴場・入浴文化

(スウェーデン ヨーテボリ, 2014年)



©Falk Wenzel

OSTEN Festival

オステン・フェスティバル

(ドイツ ビターフェルト＝ヴォルフエン, 2022年)



©raumlaborberlin

Deep Encounter

ディープ・エンカウンター

(オランダ アーネム, 2021年)

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っていただくと、
お役に立つ情報を心がけています。
あわせてご注目ください。

News

2

「GREEN GOOD DESIGN AWARDS 2026」に5点受賞

ワンピース便器「AURORA」、
便スキャン機能搭載ウォ
シュレット一体形便器「ネオ
レストLS-W/AS-W」、エコ
リモコンおよび「G selection
shower」のオーバーヘッドシャ
ワーと一時止水付き多機
能ハンドシャワーが「GREEN
GOOD DESIGN AWARDS

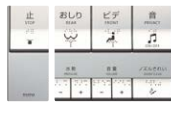
2026」を受賞。環境配慮に
すぐれたデザインと先進的な
技術を有する製品に与えられ
る世界的な賞で受賞は7回目、
計13商品となります。今後も
「きれいで快適・健康な暮ら
しの実現」と「社会・地球環
境への貢献」の両立を目指し
ていきます。



AURORA



ネオレストLS-W



エコリモコン



オーバーヘッドシャワー



一時止水付き
多機能ハンドシャワー



News

3

市村産業賞「功績賞」を 初受賞



「お掃除ラクラクほっカラリ床」搭載のシステムバスルームシンラ

TOTO独自の親水性コー
ティング技術が、権威ある
「市村産業賞」を受賞しま
した。「お掃除ラクラクほっ
カラリ床」などに採用されて
いる本技術は、水だけで皮
脂汚れを浮かせて落とし、
水あかも固着させない画期
的なものです。本来定着が
難しい成分を表面に固定す
る高度なプロセスを確立し、

累計200万台以上の出荷
を達成。産業発展への貢
献が認められました。今後
も革新的な技術で、世界中
に清潔で快適な暮らしを届
けていきます。

公益財団法人市村清新技術財団
(第58回 市村産業賞)

ウェブ→<https://www.sgkz.or.jp/prize/industry/58/index.html>

News

1

Red Dotデザイン賞4点 iFデザイン賞4点受賞

下の商品が、国際的なデザ
イン賞「Red Dotデザイン
賞2026(*1)」と「iFデザイ
ン賞2026(*2)」を受賞しま
した。Red Dotデザイン賞
は14年連続、iFデザイン賞
は13年連続受賞となりま
す。TOTOは引きつづきデ
ザインとテクノロジーの融合
を追求し、TOTOらしい商
品をグローバルに広くご採
用いただくことで、「持続可

能な社会」「きれいで快適・
健康な暮らしの実現」に貢
献していきます。

*1 Red Dotデザイン賞:1955年か
ら続く国際的権威あるデザイン賞。
主催はドイツ・エッセン「ノルトライン・
ヴェストファーレンデザインセンター」。
デザイン専門家が革新性、機能性、
品質を厳正に審査し認められた商品
に贈られる。

*2 iFデザイン賞:1953年から続く
国際的権威あるデザイン賞。主催は
ドイツ・ハノーバー「iFインターナシ
ョナルフォーラムデザイン」。デザイン専門
家が美しさ、機能性、革新性を厳正
に審査し認められた商品に贈られる。



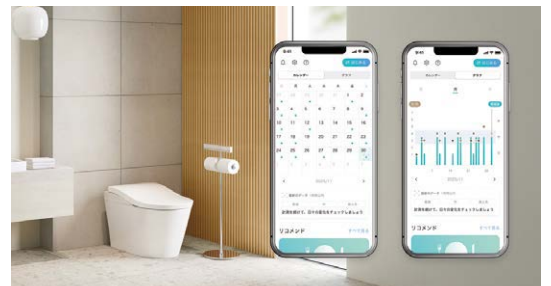
reddot winner 2026



G-セレクションシャワー



TOTO Wellness UX



AURORA



reddot winner 2026

WASHLET G5B



reddot winner 2026

GKシリーズ



reddot winner 2026

GNシリーズ

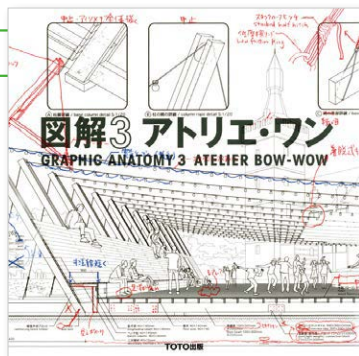


B Books

TOTO出版・新刊のお知らせ

Book1

図解3 アトリエ・ワン



アトリエ・ワンのロングセラー、「図解」シリーズ第3弾。住宅作品を収録した第1弾、公共建築やインスタレーションなどを含む第2弾を経て、第3弾は2014年以降の50プロジェクトを厳選して収録します。本書では新たに、既存転用や改修部分を色分けし、わかりやすく表現。構造や仕上げ、家具、植栽、人々

の振る舞いまでもが同時に描き込まれた独自の「図解」表現が、建築の細部と、生き生きとした空間の魅力を伝えます。

著者 アトリエ・ワン(塚本由晴+貝島桃代+玉井洋一)
定価 3,960円(本体3,600円+税10%)
体裁 260×260mm、ソフトカバー、156ページ、和英併記
発行 2026年8月

Book2

[English edition]

KAZUYO SEJIMA RYUE NISHIZAWA SANAA

1987-2005 Vol. 1 /
2005-2015 Vol. 2 /
2014-2021 Vol. 3

世界的な建築家、妹島和世、西沢立衛、両氏が主宰するSANAAの、30余年の多岐にわたる活動を一挙に網羅した、作品集の完全英語版。2021年に刊行した日本語版の造本やレイアウトはそのままに、世界の読者へ向けて発行しました。書籍自体をひとつの建築ととらえ、設計に近いプロセスで編まれた本書には、両氏



のクリエイションへのこだわりが凝縮されています。

著者 妹島和世、西沢立衛
定価 24,200円
(本体22,000円+税10%)
体裁 A4判変型(216×290mm)、ハードカバー、箱入り3冊セット、全672ページ、英語のみ
発行 2026年7月

I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

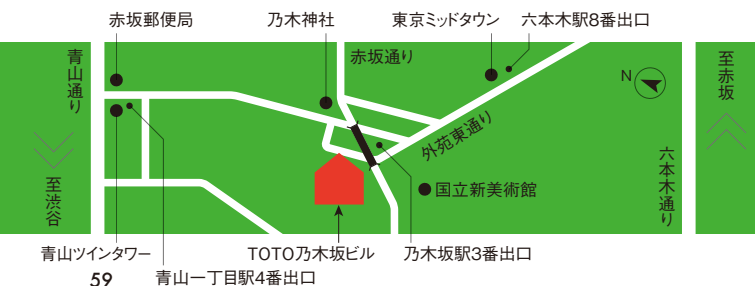
3F 電話 / 03(3402)1010
TOTOギャラリー・間 定休日 / 月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
入場料 / 無料
※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト
(<https://info.jp.toto.com/gallerma>)をご参照ください。

2F 電話 / 03(3402)1525
Bookshop TOTO 定休日 / 月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始
※詳細はBookshop TOTOウェブサイト
(<https://info.jp.toto.com/bookshoptoto>)をご参照ください。

2F 電話 / 03(3402)7138
TOTO出版 全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。
※最新情報は、TOTO出版ウェブサイト
(<https://info.jp.toto.com/publishing>)をご参照ください。

B1・1F 電話 / 03(3402)7134(東京ショールーム)
セラトレーディング 定休日 / 月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
※詳細はウェブサイト
(<https://www.cera.co.jp/showroom>)をご参照ください。

アクセス ●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



C Cera

セラトレーディングのお知らせ

イタリア・FIMA社の アウトドアシャワー「INGIRO」



INGIROシリーズ アウトドアシャワー FMF5977 希望小売価格 360,000円(税別)

自然との一体感を楽しむ現代のライフスタイルに応え、イタリア・FIMA社よりアウトドアシャワー「INGIRO(インジロ)」を発売しました。ロレンツォ・ダミアニによる意匠は、建築に調和するミニマルな直線美が特徴です。足元のフットスイッチにより、両手がふさがっていてもスムーズな操作が可能。屋外での動

作をより軽やかに、使い心地にも配慮した機能的なデザインです。ステンレス製で耐久性も高く、庭園やプールサイドなどの空間をぜひたくに彩ります。

当商品を掲載した「総合カタログ2026」は、ウェブサイト、またはFAXにて、ご請求ください。

ウェブ→<https://www.cera.co.jp/ad/20260201>
FAX→03-3402-7185



次号『TOTO通信』は2027年1月発行の予定です。

ワケ
そのカタチには理由がある。



グースネック
水栓

TOTOのキッチン水栓

RF

使うたびこちよく、
見るたび満たされる。

キッチン家事は毎日のことだから、
水栓はできるだけ優しくありたい。

この曲線が、
あなたのくらしを変えてゆきます。



SMOOTH

料理と洗ひ物の効率を上げる、操作性



CLEAN

水栓をきれいに保てる、清掃性



DESIGN

見るたびうれしい、デザイン性

TOTO技術相談室 電話:0570-01-1010
受付時間:〈平日/土曜日〉9:00~17:00
(日・祝日・夏期休暇・年末年始・当社所定の休日などを除く)

建築専門家のための情報サイト
COM-ET(コメット)
<https://www.com-et.com>

TOTOのキッチン水栓
グースネック水栓 RF



WEBはこちら



動画はこちら

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。